キラキラの思い出

かないみ〜あ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キラキラの思い出

【Ｎコード】

Ｎ４０８７Ｃ

【作者名】

かないみ～あ

【あらすじ】

沙耶と言う男運のない女の子の高校生活が、がらりと変わった快晴君と言う男の子との出会いから始まる、実話系恋愛物語です。自分が実際経験した思い出話ですが皆さんも（こんな時があったなぁ）と、共感出来る場面もあるのではないかと思いますので、是非読んで戴きたいと思います。そして、出来たらご感想など書いていただければと思います。よろしくお願い致します。

第1話〜告白〜

桜が咲く春。私、管野沙耶（あだ名はかんちゃん）は高校3年生になった…。

「かんちゃん。本当に好きだから！ねっ！」ガチャ…。いつもそう言ってすぐ切ってしまう…その子は二歳年下の桜井快晴君。高校に入学してすぐ私に一目惚れをして、共通の友達に私の名前と携帯番号を聞いたらしく、少し世間話をした後必ず

「好きだから」と言ってすぐ切る。こんな一方的な電話が毎日かかってきていた。

一目惚れなんて言われた事もなかったから正直悪い気はしない。でも私は快晴君の顔を一度も見た事がなかった。それもそのハズ。快晴君は入学早々タバコを吸ってたのがバレて二週間の停学…。バカな奴…と、思いながらも毎日かかってくる電話を楽しみにしていた私。その頃私は少し前まで3歳年上の人と付き合っていた。でも彼は仕事をしてなく、出掛ける時もご飯を食べる時も会計はいつも私のバイト代から…しまいには二股をかけられて、そして別れようと言う前にフラれた。正直私は男を見る目が全くなくて、

「とりあえず付き合ってみなきゃわかんないんだから」と今まで何人かの人と付き合ってはみたがほとんど長くは続かなかった。

「私って一生こんな人生なのかも」と、落ち込んでた時に快晴君から電話が来るようになった。「今度誰かと付き合う時は必ず相手をよく見てから付き合おう！」と、決めた。しかし…快晴君の停学が解ける前日、いつものように大体同じ時間に快晴君から電話がかかって来た。だけどいつもと少し違う。

「オレ、いつも冗談っぽく好きって言ってるけど、本当にかんちゃんの事好きなんだよ」。と、告白された。…どうしよう。快晴君の事は嫌いじゃないけど、顔も会って話した事もないし…。しかも、

さっき
「今度誰かと付き合う時は必ず相手をよく見てから付き合おう」って決めたばかりだもん。
「…ごめん。快晴君、私快晴君とは付き合えないよ。」
「どうして！？」
「だって、まだ私、快晴君とは電話でしか話した事ないし、まだ快晴君の事よく知らないもん」
「だったら付き合ってから知って行けばいいじゃん。俺本当にかんちゃんの事大好きだからさ！ねっ？お願い！」…すごい積極的。
「俺の事嫌い？」
「そんな事ないよ！私、快晴君から電話来るようになって、元カレの事忘れらるって思ったし、快晴君と話すのすごく楽しいよ！」…これは本当の事。快晴君と話してすごく楽しかったし、正直癒された。でもそれは好きという気持ちではないと思う。だけど快晴君は、「かんちゃん！好き！お願い！付き合って！」の繰り返し。あまりの押しの強さに、私はとうとう
「うん。」とＯＫしてしまった。

第2話～ご対面～

「ハァ…」快晴君からの電話を切った後、1人で悩んでいた。
「また押しに負けてOKしてしまった…どうしよう…これじゃあ今までと一緒じゃん。」OKした時快晴はそれはもう、見なくてもわかるくらい喜んでいた。今さらやっぱり付き合えませんなんて言えない。しばらく考えた。
「よしっ！悩んでいてもしょうがない！快晴君は本当に私の想ってくれてる。
今度こそ私の事を大事にしてくれる人かもしれないし！顔は見た事なくたって大事なのは中身よ！」そう自分に言い聞かせて眠りに就いた。そして翌日。
「んー…やっぱりちょっと憂鬱。」快晴君と会うのは放課後。
「ちょっと不安」そう思っていると
「かんちゃん今日元気なくない？どした？」と、友達の聖子が心配そうに私に聞いて来た。顔に出ていたらしい。
「えっ？何でもないよ～」
「そう？ならいいけどさ」…今は言えないなぁー。皆に怒られるしなぁー。
「かんちゃんは押しに弱すぎ！そんなんだからいつもロクでもない男に捕まるんだよ！」絶対言われる……。いつも一緒にいる仲良し6人組。気は強いけど優しい聖子にギャルの真実。いつも予想もつかない事ばかりして皆をヒヤヒヤさせる久美に自分気ままな早苗、そしてそんな皆を暖かい目で見守ってるお母さんみたいな佳乃。みんな本当に大好きな友達。でもやっぱり今は言えないなぁ。そうこうしてる間に放課後になってしまった。快晴君との待ち合わせ場所は1階の水飲み場。
「よしっ！」私は待ち合わせ場所に向かう。そして向かっていると
「かんちゃん！」後ろから私を呼ぶ声がした。振り替えると1人の

男の子が立っている。
「快晴君？」
「うん！」初めて見た快晴君は何て言うか、背はそんなに高くはないけどガッチリした体つきに、顔は浅黒くて茶髪がよく似合っている。そして目が凄く大きい！カッコいいと言うか悪そうだなーっていうのが私の第一印象だった。快晴君は電話で話す時とは全然違って、とても恥ずかしそうにモジモジしていた。その悪そうなイメージとのギャップに
「キュンッ」と母性本能をくすぐられされた。

第3話～暴走族！？～

「とりあえず学校出よっか！」照れ臭そうに言ってきた快晴君。
「そうだね。」私もニコッと笑って答えた。私は週6でバイトをしていたから
「バイトまでしか一緒にいられないけどごめんね？」と言うと
「いやっ！全然だよ！ちょっとでも一緒にいれるだけでオレすごい嬉しいから……」話してくうちにだんだん声が小さくなっていく。自分で言って相当恥ずかしかったらしい。こんな恥ずかしがり屋の男の子を見るのはとっても新鮮で、すごく自分が想われてる感じがして嬉しかった。
「ありがとう！」快晴君を見てまたニコッと笑った。何だかこのまま付き合っていったらちゃんと快晴君の事好きになれそうと思った。そして、バイトまでの時間学校とバイト先の間くらいにある広めの公園の階段で座って話をした。何処に住んでて誕生日はいつとか…。そして私が
「ねぇ、何で私の事好きになったの？」
ちょっと意地悪っぽく聞いた。そしたら快晴君はまた照れ臭そうに話してくれた。
「入学してすぐかんちゃんが正人と話してるのを見たんだ。」正人とは私の昔から仲良くしていた2歳年下の友達で高校に入って快晴君と友達になったらしい。
「その時本当に自分でもビックリするくらいドキドキして、かんちゃんがいなくなったの見てすぐ正人に今の誰？って聞いて、ついでに携帯番号も聞いたんだ。
今まで一目惚れなんてした事なかったから自分でも本当に驚いてるんだよ。本当にかんちゃんはかわいいよねっ！電話してても絶対優しい人だと思ったんだ。だから話す度にさ……ねぇ…」途中いつ

もの電話の時みたいに元気になったのにまた急に照れ始めた。
「ハハハ」思わず笑ってしまった。
「ごめん、笑っちゃって、でもありがとね、嬉しいよ」私もちょっと恥ずかしかったから階段の下に流れてる川を見ながら言ったら
「かんちゃん…」
「うんっ？」と快晴君の方を向いた瞬間
「チュッ☆」キスされた。
「チューしちゃった☆」と快晴君が言った。私も少しビックリしたけど
「本当だね。」と私が答える。快晴君はすごく嬉しそうだった。でも私は正直（早いなぁ～、いくら付き合ってるって言ったってさっき会ったばかりなのになぁ、この人手ぇ早いなきっと……）そんな事を思ってしまった。その後また少し話をしていたら今度は驚くような事を言い出した
「オレさ先輩に頼まれてもうなくなった暴走族を総長として復活させるかもしれないんだ」とこれまた嬉しそうに言ってきた
「はっ？何それ！」これには私もさすがにビックリした。キスされた事よりも驚いた。快晴君はどうも世間でいう
「不良」だったらしく、暴走族に入りたいし喧嘩大好き男だった。
「本当に暴走族復活させるの？」
「うん！先輩に頼まれたから断れないんだよね。オレ自身も復活させたいし」意志は固いらしい。そんな話をしているとバイトの時間になって、とりあえず快晴君に送ってもらいその日はそこでバイバイした。
「ハァ…」何かせっかく好きになれるかもって思ってたのによりにもよって暴走族……。世界平和で自分も周りのみんなも何事もなく平和で暮らしたいという平和主義の私としてはあの快晴君の発言にはちょっと幻滅というか、このまま私はあの人と付き合ってもいいの？と考えてしまった。
「かんちゃんどうしたの？」バイト先の弥生に話しかけられた。同

じ中学校で同じ部活だった弥生とは、中学校1年生からの友達。このバイトを紹介してくれたのも弥生だった。すごく面白くて二人でバカやって笑い合ってる。高校の友達とはちょっと違う姉妹みたいな感じだから何でも話せる。
「ちょっと聞いてよ〜！」本屋さんのレジの仕事でヒマな時は二人でずっと話してる。私は快晴君から毎日電話が来ていた事は前から話してたから押しに負けて付き合ってしまった事や、すぐキスされた事や不良だった事に暴走族の事、でも照れ屋でカワイイ所もある事、全部弥生に話した。そしたら弥生は笑いながら
「うける〜！あんた相変わらずだね！」笑われた……。
「顔も知らない、どうヤツかも知らないのに付き合ったあんたが悪い。」
「そうなんだけど…」
「それにさ〜喧嘩大好きで暴走族作りますって男が照れ屋って……。まぁ、そういう人もいるんだろうけどそういう風に見せて早くやることやりたいだけなんじゃないの？」…ガーン…
「そうなのかなぁ…」
「まぁ、それはわかんないけどさ、あんたが付き合うって決めたんだからね！頑張りな。じゃあまた明日ね」いつの間にか閉店時間で。レジのお金を確認して終了。家が遠いからお父さんがいつも車で迎えに来てくれる。家に帰ってご飯を食べてお風呂に入って、自分の部屋に戻り
「フゥ」とベッドに倒れこむ。
「あーあ、どうしよう、せっかく好きになれるかもって思ってたのに暴走族の話し聞いてちょっと冷めちゃったなぁ…」そんな事を考えていると
「ピロロロ〜ン」携帯が鳴った。相手はもちろん快晴君だ、
「もしもし」
「もしもしかんちゃん！起きてた？」相変わらず元気だ。
「起きてけどもう寝ようと思ってたよ。」まだ寝るつもりはなかっ

たけど嘘をついてしまった。
「え～？いっぱい話したかったのになぁ～。でもしょうがないね☆いっぱい寝てオレの夢見てね☆」
「ハハハ、わかったよ、ごめんね？」と言うと
「いいよ～！でも寂しいなぁ。でも我慢するぅ…じゃあおやすみ！大好きだよ～！」と言って切った。ハァ…。あの話し方はきっと甘えん坊だなぁ。甘えん坊の不良かぁ…。うーん…。私は不良＝硬派というイメージを持っている。私の学校は不良が多い学校で有名だ。快晴君みたいに暴走族に入ってる人もすごく多い。真実の彼氏も聖子の彼氏も暴走族に入ってるヤンキー。二人ともすごい硬派で男らしい。快晴君みたいな甘えん坊のヤンキーなんて見たことない。これから先がどんどん不安になって来た…。

第４話～また停学！？～

次の日も私はテンションが上がらない。すでに快晴君と放課後会うのが憂鬱になっている。
「中途半端な気持ちで付き合うからこうなるんだよ。私のバカー！！」自分で自分が情けなくなる。きっと快晴君はそんな私の気持ちなんて知る訳もなく放課後になるのを楽しみに待ってるだろう。さらにテンションが下がる。だけど快晴君の事をもっと知りたいと思う気持ちもある。いい所だってあるし、もっと好きになれるかもしれない…。そう考えるとなんか
「よしっ！」と気合いが入る。放課後になり昨日と同じ水飲み場で待っていると
「かんちゃん！」と快晴君が現れた。相変わらず恥ずかしそうに、でも昨日よりは少し緊張もほぐれているみたいに少しニコッと笑っていた。
「行こっか」
と快晴君が行って学校を出た。私がアルバイトの日は公園デートという事にした。それでも快晴君には十分嬉しいみたい。会話も快晴君が楽しそうに話してるのを見るとやっぱり楽しいなと思った。でも暴走族の事を考えるとなんかテンションが下がる。一応快晴君に聞いてみた。
「ねぇ、本当に暴走族になるの？」そしたら快晴君は
「うん！あの族が復活したらまじカッコイイよ！」と言ってきた。やっぱりこのくらいの歳の男は一度は暴走族というものに憧れを持つものなのだろうか。私も別にそういう人達がキライな訳ではない。そういう友達もけっこう沢山いる。でも自分の彼氏がそうなるのは嫌だった。
「そうなんた〝…」と少し悲しい顔と声で言うと快晴君が
「もしかしてかんちゃんそういうの嫌い？」と不安げに聞いて来た。

私は
「自分の彼氏が暴走族なのは嫌…」と言った。すると快晴君が
「じゃあ、かんちゃんオレの事嫌いになっちゃう？」と悲しそうな顔で言ってきた。私は
「そんな事ないよ」と言う自信がなかった。
「わかんない…」と答えた。すると快晴君が泣きそうな顔で
「オレ、かんちゃんに嫌われるのだけは嫌だよ。でも族の事はもう決まった事だしメンバーも大分集まったんだ。今更復活出来ないなんて言えないんだ。」と快晴君が言った。そして
「だけど、かんちゃんが一番大事なの！だからオレ、かんちゃんに嫌われないように頑張るからさ！ねっ！だから嫌いにならないで」と私にきつく抱きついて来た。しばらくして少し体を離すとキスをしてきた。私は
「わかったよ」としか言えなかった。バイトに行き、さっきの事を考えていた。本当に快晴君は私の事が好きなんだと思う。だけど暴走族に入るのは絶対で、今更止める事は出来ない。だけど、私の事が1番大事なら私の為に止める事は出来ないのだろうか。そんな気持ちもあり、好きになれそうなのにそれが邪魔して心の中にある気持ちのバロメーターが上がって行かない…。すごく切ない気持ちだ。好きになりたいのになれないなんて一体どうしたらいいんだろう。とりあえず明日は土曜日。明日も明後日も快晴君とは会う約束はしなかった。正確に言うと
「バイトがあるから」と、断ってしまった。バイトなんて休もうと思えばいつでも休めるし、別に朝から夜までの仕事でもないし会おうと思えばいくらでも時間は作れるのだけど。どうしても会うのが嫌だった。快晴君はガッカリしてたけど私はホッとした。電話は毎日来たけど少し話してもう寝るからと言ってすぐ切った。そしてまた月曜日、また今日から1週間かぁ…。そんな思いで学校に行く。放課後にならないで！なんて思っている私。本当にどうしたらいいんだろう。快晴君の事好きになりたいのに～！とブツブツ独り言を

言って頭を両手でクシャクシャとする。すると真実が、
「かんちゃん！」と大声で叫んだ。
「わっ！何っ？」と私はビックリして座っていた椅子から落ちそうになる。
「さっきから何回も呼んでるのになんか全然聞こえてないんだもん！」と真実が口を尖らせて言う。周りの４人もさっきから私の独り言やおかしな行動を見て笑っていた。私も笑うしかなかった。そして真実に
「ごめん真実～。で、どうしたの？」と聞くと
「携帯！さっきからずーっと鳴ってるよ！」
「えっ？」机の上においてある携帯を見たら着信三件にメールが一件。こんなに来てて、しかもバイブにしてるから机の上でなったらすごいうるさいのにこんなに気付かなかったなんて……。見ると全部快晴君からだった。（何事？）と思いメールを見ると「また停学になりました。ごめんなさい。もう帰ります。」はぁ？どういう事？と思い、みんなに聞かれたくないからろうかに出て快晴君に電話をする。
「もしもし」
「もしもし快晴君？どういう事？」と私が興奮ぎみに言うと
「かんちゃんごめんね。同じクラスの奴とケンカしちゃってさ、その相手が先公にチクったんだよ。」ちょっと強い口調で言ってきた。きっとそのケンカのイライラがまだおさまってないのだろう。話を聞くと同じクラスの特に仲が良いって訳じゃない奴が自分の持って来たＭＤがなくなったと言ってそれを快晴君が取ったとみんなに言いふらして歩いてたみたいで、それを聞いた快晴君がキレて自分から手を出したらしい。そしてヤられた相手が先生にチクり、（自分は何もしてないのに桜井君がいきなり殴ってきた）と言って、快晴君がいくら説明しても先生はもともと不良の快晴君が気に入らないから、その場ですぐ停学処分となったらしい。快晴君は
「あんな奴のＭＤなんて誰が取るって言うんだよ！ったく先公もよ

ーふざけんじゃねーよ。」怒りを押さえられないみたいだ。私もさすがにそれには、何の証拠もないのに快晴君がやったと言いふらすその人も快晴君の言う事を何一つ信用しない先生にも腹が立った。だけど私にはどうする事も出来ない。快晴君に

「そのケンカした相手って誰？」と聞いたら

「同じクラスの富山って奴。」

「えっ？」名前を聞いてあららーと思った。私の隣のクラスの留美の弟だった。留美と私はけっこう仲がいい。名前を聞いて知らない奴だったらちょっとそいつに会って

「あんたどういうつもり？」とも言えたけど、友達の弟には流石に言えない。

「かんちゃん知ってるの？」と聞いてきたので

「友達の弟だよー」と言うと

「そっかー、なんかごめんね」と謝ってきた。

「快晴君が悪い訳じゃないんだからさ、元気出してよ！」と、慰める。確かにケンカは良くない事だけど、殴りたくなる快晴君の気持ちはわかる。逆になんの話も聞かずただ暴力を振るったというだけで停学にする先生に問題があると思った。もちろん快晴君に殴られた奴も。なんだか快晴君がすごく可哀想で、だけど何て言ってあげていいかわからないからただ

「元気だして」としか言えなかった。しかし私は快晴君を可哀想と思ってる反面、これでしばらく会わなくてもいいと少しホッとしていた。だけど快晴君は

「ありがとう！かんちゃんと話してちょっと元気出たよ！好きだからねっ！」

と言ってきた。

「ありがとう、元気出て良かったよ。しばらく家で大人しくしてるんだよ」と私が言うと

「わかったよ！また夜電話するね！」と言って電話を切った。フゥとため息をついてもう授業が始まっている教室に戻った。

第5話～元カレの存在～

教室に戻り先生に
「ごめん！」と言って席についた。そんなのでも許される学校だった。前の席の佳乃が後ろを向いて
「何かあったの？」と聞いてくる。
「1年生の友達が停学になったんだって。」と佳乃に言った。やっぱり何となく彼氏とは言えなかった。
「あぁ、かんちゃん最近1年生の子と仲良いもんね」そう言って前を向きまた授業を聞き始めた。いつ皆に快晴君と付き合った事を言おうか悩んでいた。きっと皆は
「何でもっと早く教えてくれなかったのぉ～！」と言ってくると思う。だけど今の私はこのまま快晴君と付き合って行く自信が全くない。やっぱり自分の中の気持ちがハッキリするまでは言わないでおこうと思った。学校が終わり、今日は皆で早苗の家に集まる事になった。普段は皆学校が終ると彼氏と一緒に帰るからあまり放課後遊ぶ事はないが、たまにこうして学校から家の近い早苗の家に皆で集まる。学校でも十分話てるけど、それでも話たりないと言わんばかりにみんなそれぞれ悩んでる事や彼氏のグチを言い合う。もちろんエッチな話も。、４クラスの中で私達のクラスだけが女子しかいないクラスだった。しかも誰も恥ずかしがらない性格な為平気で何でも話してくる。実際エッチな話が1番盛り上がる。6人の中で彼氏がいないのは佳乃だけ。皆からすると私もいない事になってるのだけど。何だかんだグチを言っても4人とも彼氏の事が大好きですごく仲良しだ。それが私にはすごく羨ましかった。
「私も早く普通に付き合いたいなぁ～。何やってんだろう私…。」
また1人でウ～ンと、うなっている。それを見た早苗が
「かんちゃんは最近どうなの？」と聞いてきた。私は
「えっ…何が？」ドキドキしながら聞き返した。

「最近1年生と仲いいじゃん！みんな知ってるんだからぁ～」と、腕をつついてきた。まぁ、放課後必ず一階に行くしね。みんなに気付かれて当然なんだけど。
「仲良くなった人はいるけど、別にそれだけだよ～！」
「え～、つまんなぁい。付き合っちゃえばいいじゃん！」と早苗が言う。他の4人も
「そーだよ、かんちゃん彼氏いないもんいいじゃん、付き合っちゃえって。」と言っている。基本的に彼氏いない＝誰でもいいから付き合っちゃえって言うのが私達の教訓というか、みんなも今の彼氏とは好きになっちゃったから告白！とかでも大好きだった人に告白されたから！とかじゃなく、やっぱり何となくいい感じになって、まぁ、彼氏いないからいっかぁっていう感じで付き合ったのだが何故か相性のいい人にばかり出会い、4人とも軽く1年は続いている。私だけハズレばっかりの高校生活…。
「私皆と違って男運ないからさ～、もうちょっと考えるわ～」と言うと皆が
「確かにかんちゃんは男運がないからねぇ～。プッ。1年生の時からそうだったよね。なんか変な奴にばっかりに好かれるんだよね～。」とウンウンと頷きながら皆が笑う。私も自分の事だけど過去を思い出したら笑えて来た。
皆でしばらくその話で盛り上がった。
今日はバイトがなかったから、夜まで早苗の家で語っていた。
帰ってご飯を食べてお風呂に入った。
こんな時お母さんに相談とか出来たらなぁ～と思う。家はお父さんよりもお母さんの方が怖い。
お父さんはどちらかと言えば、お前の好きにしなさい的な感じなのだが、そのせいかお母さんが厳しい。
特に男の事になるとそれはもう恐ろしい事になる。
中学生の時にはその時付き合っていた彼氏と自転車で一緒に帰ってるのがバレてしばらく自転車通学させてもらえなかったり、高校に

入って彼氏が出来たと言ってみたら2週間無視されたり。他にもいろいろあるが、どうも私は全く信用されてないみたいで、付き合う＝すぐエッチ＝汚ならしいみたいな考えらしい。今の状態をお母さんに言っても逆にややこしくなるだけなので、普通に会話して、部屋に戻る。部屋に戻るとすぐ電話が鳴った。快晴君からだった。停学中なのに友達の家で遊んでるらしい。まぁ、停学中なんて暇だし、そりゃあ遊びたくもなるよね。

「あー早くかんちゃんに会いたいよ～」と友達がいる前でも平気でそんな事を言う。後ろの友達が

「クソー！ラブラブすんなぁ！羨ましいー！」と叫んでる。快晴君が

「フフンっ！いいだろう」と自慢気に言っている。ちょっとカワイイと思ったが、私は何も言わなかった。それから少し話して

「じゃあねかんちゃん！大好きっ！」と言って電話を切られた。相変わらず一方的な電話だなぁと思いながら携帯を置いてベッドに横になる。ハァとため息をつくとまた携帯が鳴った。当時の携帯電話は指定着信音なんてないからみんな同じメロディで、誰だろう、また快晴君からかな？と思い、画面を見ると（村井　佑）という名前が出ていた。少し前に別れた元カレからだった。一瞬

（ドキッ！）とした。別れてから初めてかかって来た電話だった。どうしても番号を消す勇気がなくて、アドレス張をそのままにしていた。ずっとコールが鳴っている。（出なきゃ）と思い、通話ボタンを押す。

「…もしもし」と緊張しながら少し低い声で出た。

「もしもし沙耶？俺、佑だけどわかる？」まだ別れて1ヶ月くらいしか経ってないのにとても懐かしく感じる声だった。付き合っていた時の楽しかった光景ばかり頭の中に甦ってくる。

「わかるよ。番号消してないから。」と、一応冷静を装って言うと

「オレも、お前の番号だけ消せないんだよなぁ。今まで別れた女の番号はすぐ消せたんだけどなぁ、なんでだろうな。」と言ってきた。

（何っ？何で今頃電話して来るの？せっかく忘れてたのに何でまた

思い出させるのよぅ！しかも何っ？その私だけは今まで元カノとはちょっと違うぞみたいな期待を持たせる言い方！）１人でまた頭の中がパニックになっている。
「もしもし聞いてる？」と佑が心配そうに言う。
「大丈夫だよ！それより何っ！？なんか私に用事でもあるの！？」興奮しながら言う。
「いやぁ、別に何にも用はないんだけどさ、どうしてるかなって気になったんだ。…やっぱりまだオレの事怒ってるよな…？」と少し弱々しく言う。
「怒ってるよ。だいたい私に電話なんかして来てさ、彼女はどうしたのよ！」と、別に二股かけられた時のもう１人の女の事なんて聞きたくなかったが、聞いてしまった。
「あぁ、知らね。アイツわがままなんだよ、やっぱり沙耶が１番いいな。」佑がいきなり聞き捨てならない事を言ってきた。
「はぁ？あんた何言ってんの？」さすがの私も訳がわからないと言うか、コイツ今更何言ってるんだろうと思った。だけど心のどこかで佑から連絡が来たのをすごく喜んでる自分もいる。今まで付き合った人と佑はやっぱり違った。あたしにとって初めての事がたくさんあったからだ。初めての年上の彼氏で毎日車で学校にお迎えに来てくれたのがすごく嬉しかった。休みの日は遠くまでドライブした。初めて彼氏の家にお泊まりしたのも佑の家だったし初めて彼氏の親と仲良くなって一緒にお出かけしたりしたのも佑の両親だった。私の家に初めて入った彼氏も佑だった。もちろんその時は家に誰もいない時だったけど。だけどお母さんに佑と付き合ってるのがバレたけど、佑の時は許してはいなかったけど何故か何も言われなかった。ちなみに二股をかけられたのも佑が初めてで…。とにかく佑との思い出は他の元カレとは比べ物にならないくらい多かった。たった半年しか付き合ってなかったのだけど、すごく濃い半年間だった。その分フラれた時の悲しみは今までの３倍だった。だけど、今佑が私に電話をかけて来た。すごく嬉しいけど本当に何を考えてるんだろ

うと思った。すると佑が
「…オレさ、今すげー後悔してるんだよ…お前と別れた事。沙耶と付き合ってる時本当楽しかったんだよ。だけど、今の女にしつこく迫られてさ、なんか、オレの事すげー想っててどうしても断れないでお前と同時進行になっちゃったんだよね。オレもバカだよな。沙耶だってちゃんとオレの事見ててくれてたのにな…。」思わず涙目になってしまう。あの時のすごくツラかった時の事を思い出してしまった。
「本当だよっ！私がどれだけツラかったかわかる？毎日毎日目が腫れるまで泣いてたんだからね！すごい佑の事好きだったから、ずっと一緒にいたいって思ってたのにぃ…佑ヒドイよ！」目に涙を溜めるのにも限界があり、次から次へと涙が溢れてこぼれる。
「本当にごめん。オレ、アイツとは別れるよ。だからもう1回沙耶…オレとやり直せないかな？」佑からの思いがけない告白にせっかく忘れていた佑への想いが完全に甦ってしまった。佑からの告白はすごく嬉しかった。でも私にはちゃんとわかっていた。佑はもし今私がやり直すと言って、また前みたいに付き合う事になったとしても今の女とは絶対に別れない。
佑はそういう男だ。
佑と別れた原因は佑の二股だが、実際付き合ってた間も女関係の問題がいくつもあった。知らない女から毎日のように電話が来て私が佑から電話を取りその女と大喧嘩した事もあった。きっとその女と浮気したと思う。私が修学旅行に行ってた時も電話しても様子がおかしかったし。帰ってきて携帯を見たら知らない名前の女達に電話をかけていた。今ヨリを戻した所で何も変わらないし、上手く行くわけがない。だけどバカな私は頭の中では佑がどんな奴かわかっているのに、絶対また辛い思いをするのに、それでもヨリを戻したいと思ってる。本当に大バカ者だ私は。佑は
「また電話する。それまでに考えておいて。オレ、お前がオレの所に戻って来てくれるって信じてるから。」そう言って佑は電話を切

った。
佑は私がまだ佑に未練があると分かっているんだろう。
最初は私の気持ちを探ってたが、私が泣いて佑の事を言った時にきっとまだ私は自分に気があると確信したんだろう。全くズルい男だ。だけどその男にまたいいように振り回されると分かっていながらもどうしようか迷ってる私はもっとどうしようもない奴だ…。だけどそれくらい私の中での佑の存在は大きかった。

第６話～元カレとの夜～（前書き）

ここまで読んでくださった皆様本当にどうもありがとうございます。
初めて書くので読みにくい所も多々あると思いますが、最後まで頑張って書きますので是非、読んでくやって下さい。
さて、この第６話は少しエッチなお話があります。ご了承下さい。

第6話～元カレとの夜～

電話を切った後しばらく考えた。
快晴君が停学になって少し距離をおけるとホッとした矢先に佑からの電話。（もう、訳わかんない。私どうしたらいいんの？）

普通に考えて佑とヨリを戻したってまた二股かけられて、私は絶対幸せにはなれないと自分でわかってるんだから、佑の言葉なんか信用しないでヨリを戻さなきゃいい事なのだが、久しぶりに声を聞いて話をしてしまって佑への想いがまた私の中に戻って来てしまった。
（てゆうか快晴君はどうするの？）
頭の中が佑の事でいっぱいだったけど、私は今快晴君と付き合ってるのだ。もう考えるのが面倒くさくなった。
「今日はもう寝よう。」その日は頭の中がごちゃごちゃのまま寝た。
あれから数日経った。相変わらず快晴君からは会いたいとか好きだとか言う電話が毎日来ている。私は電話が来る度素っ気ない態度をとっていた。快晴君もだんだん気付き始めたらしい。
その日快晴君からの電話で快晴君が
「かんちゃんオレと話してても楽しくない？」と聞いて来た。私は
「そんな事ないよ」とは言うものの、快晴君は
「嘘だ、最近すごいテンション低いよねー…オレの事キライになった？」
快晴君の事はキライじゃない。
「キライじゃないよ、大丈夫だから…」
そう言って電話を切った。私は快晴君の事はキライではない。でもきっと好きでもない。
佑とヨリを戻したいかどうかも今はまだわからない。
しかし昨日佑から電話があった。私は佑と会う約束をした。この前の返事を聞きたいと言ってきた。

次の日、バイトが終わり、いつもならお父さんが迎えが来るのだが、今日は佑に会う約束をしてたので、きっと遅くなるから友達の家に泊まると言って今日は迎えに来なくていいよと断った。
泊まると言っても佑の家に泊まる訳ではない。事情を弥生に頼んで佑と会った後弥生の家に泊めてもらう事にしていた。
弥生は
「じゃあ待ってるからね。頑張れよ。」と言って帰った。駐車場を見ると1ヶ月ぶりに見る黒いセルシオが止まっていた。
「よしっ。」私はドキドキしながら車に向かった。助手席のドアを開けた。柑橘系の匂いがたまらなく懐かしく感じた。

佑の顔を見ずに車に乗った。すごくドキドキして顔が見れない。どうしてこんなに緊張してるのだろう。まぁ、つい1ヶ月前まで大好きだった人と会っているんだから当たり前か。
「久しぶりだな。」佑が話かけてきた。こっちを見ているのがわかるが私はどうしても佑の方を向けない。
「うん」前を見たまま答えた。
顔を見たら泣きそうになるかもしれない。…すると佑が両手で私の顔を佑の方に向かせた。
「…やっと顔見れた。」とニコッと笑った。久しぶりに見た佑の顔。綺麗な顔立ちに鋭い目、シュッとした鼻に薄い唇。快晴君がかっこいい系だとしたら佑は美少年系だ。私はこの佑の鋭い目が苦手だった。なんてゆうか、何でも見透かされてそうだし、あの目で見つめられるとすごく自分がおかしくなりそうなくらいドキドキする。だから苦手。

相変わらず佑の目に私はドキドキしてまともに顔が見れなかった。
「こっち向いてよ」と優しく佑が言う。
「ムリ。」私が冷たく言う。

「どうして？オレの目にドキドキしてるの？」佑がイジワルっぽく言った。
「そんな訳ないじゃない！勘違いしないでよね！」ムキになって言う私に佑は笑いながら
「ゴメンゴメン」と謝った。佑は私の顔を見れば何でもわかるみたい。

「ドライブでもする？」と聞いてきた佑に
「しない！」と即答した。
佑はククと笑いながら
「じゃあその辺で話そうか」と言った。

来たのはいつも快晴君とデートしてる公園。夜になると街灯も少なく、人も全くいない。
「沙耶、まだ怒ってる？」
「何を？」
「二股かけちゃった事。」と佑は申し訳なさそうに言ってきた。
「怒ってるよ。あんなにショック受けたの生まれて初めて」と落ち着きながら言った。
「本当に悪かったと思ってる。ごめんな？」と言って私の髪をなでた。私は泣きそうになったのを我慢した。

すると
「沙耶…」と言って私を優しくギュッと抱いた。快晴君の力強い抱き締め方とは違って優しい抱き締め方…。（ダメだ、泣きそう。）そう思ったら目から涙がポロッとこぼれた。もう止まらなかった。
「もーっ！佑のバカぁー！何で二股なんてかけるのよぉー！」と佑の胸の中でワンワン泣いた。フラれた時のあの気持ちを思い出す。
「あの時本当に死にそうなくらいツラかったんだからねー！」私は泣きながらこれでもかというくらい佑に文句を言った。佑は私の髪

を撫でながら
「本当にごめんね。」と何度も謝った。
やっと落ち着いた私は佑の顔を見た。

大好きだった佑の顔を。佑も私の顔をじっと見ている。佑の顔が近づいてくる。そして佑の唇が私の唇にそっと触れた。わたしはそれを拒否しなかった。やっぱり佑に気持ちがあるからだ。
すると佑の舌が私の口の中に入って来た。私の唇はされるがままだった。すると佑の手が私の胸を撫でている。私は
「ちょっと待って！」と立ち上がった。しかし佑は完全にその気になってしまったみたいで私の腕を引っ張り座らせると私の上に乗っかり上半身を倒された。

完全に動けなくなった。
「佑！ちょっと待って！私そんなつもりで来たんじゃない！」

必死で抵抗するが佑は気にせず私を黙らせようとキスをする。手は服の中に入りブラジャーのホックを外す。
そして佑の唇が離れた。
「オレ、沙耶としたい」佑が私をじっと見つめる。私の苦手な目…。私の心臓はドキドキからバクバクへ変わって行く。佑は私を見つめながら
「いい？」と聞く。私は佑の目に負けた。
「ここじゃあイヤ」そう答えると佑は私の上から避けて私を立たせた。私の手を引いて佑は私を車に乗せた。向かったのは佑の家。同じ地元な為、車だとすぐ佑の家に着いた。私は弥生にメールをした
〔ごめん、佑の家に泊まる〕…するとすぐ弥生から返事が来た。〔きっとそうだと思ってたよ。後でちゃんと話し聞かせなさいよ。避

妊はきちんとしなきゃダメだよ」
さすが弥生だ。明日きちんと謝ろう。

佑の部屋に着くなり佑は私を押し倒す。
久しぶりの佑のベッド。
佑の匂い。佑がキスをしてくる。さっきよりも激しいキス。舌を入れて絡めたり吸ったり。さっき付け直したブラジャーのホックをもう一度外す。私の服を脱がし自分も脱ぐ。相変わらず細いが割れてる腹筋に胸筋、ガッチリした腕。その体が乗っかってきて、キスをしながら手は私のふっくら盛り上がっている胸を優しく触る。「アッ…」思わず声が出てしまう。佑に触られてるのかと思うとスゴくゾクゾクする。唇は私の唇から離すと耳にキスをして首筋を舌の先でツーッと下がり、胸を舐めた。イヤらしく音をたてながら乳首を吸ったり舌で転がしたり。
「ハァハァ…」もう吐息しか出ない。佑の手が下半身に来た。ズボンを脱がせパンツの上から私の大事な部分を指でなぞる
「アッ…イヤ…」私は腰を動かす。
「イヤじゃないクセに。沙耶すごく感じてるでしょ。」耳元で佑がイジワルっぽく囁く。パンツを下ろし、佑の指が入って来てそれを出したり入れたり繰り返している。
「アンッ…ハァ…佑…」私は佑の腕を掴む。
「どうしたの？イキそうなの？」私が体をクネクネ動かすと私の中に入ってる佑の指はさっきより早く出し入れをしている。私はアッと言う間に果てた。まだぐったりしている私の体を仰向けに直すとコンドームを付け、もう完全に大きくなった佑のモノが私の中に入って来た。
「ン…」必死に手で口を塞ぎ声が出るのを我慢する。佑は最初ゆっくり腰を動かすとだんだんと早くなった。佑とのエッチは本当に気持ちがいい。女好きの佑はやっぱりウマイ。すると
「ハァ…沙耶、すごくキモチいいよ。オレもうダメだ…」とせつな

げな顔で私を見た。
「イっていいよ…」そういうと佑は最後の力を出し、すごい速さで腰を動かすと一気に果てた。
佑が私の上にドサッと落ちてきた。

少し落ちついてきたら佑はシャワーを浴びに行った。
その後私は1人で考えた。佑とエッチした事には後悔も何もない。だけど、佑に対する気持ちはきっとあまり無い。確かに未練はあるけどやっぱりヨリは戻せない。さっきのエッチには気持ちが入ってなかったような気がする。フと横を見ると佑の携帯電話が目についた。私はこっそりと見た。
「やっぱり…」見ると、メールには別れると言っていた女から
「今日会いたかったぁ、まぁ、用事があるなら仕方ないね。また明日ね」…。彼女とはまだ別れていないらしい。送信メールを見てみると
「1日会えないけどガマンしてね、明日また会いに行くから。愛してるよ。」
それを見た私は（プツン）と心の中で何かが切れるような音がした。
その瞬間何かから解放されたようなとても清々しい気持ちになった。
私は（もう佑の事は忘れよう）と決心した。

佑がシャワーから戻り次に私がシャワーに入った。佑はきっと私が佑とヨリを戻すと思っているだろう。戻さないと言ったら佑は何て言うだろうか。

シャワーから出ると佑が缶ビールを飲んでいた。ソファーに座った私の隣に来て
「久しぶりの沙耶とのエッチすごい気持ちよかったよ。またしようね」と佑が言った。
「今日が最後だよ」私が佑の顔を見て言った。

「えっ？」佑が驚いた顔で私を見た。
「私本当に佑の事好きだった。楽しかった思い出もたくさんある。今日だって会うの実はすごいドキドキしてた。」
「じゃあどうして？」佑が私の腕を掴む。
「佑はきっと1人の女じゃ満足出来ないんだよ。あの彼女とだって別れてないんでしょ？私は私の事だけを好きになってくれる人と付き合いたい。」まっすぐ佑の目を見て言った。
佑は何も言わなかった。
「そっかぁ…」と言ってしばらく黙り込んだ。きっと私がヨリを戻すと思ってたからそれなりにショックを受けたんだろう。しばらくして佑が口を開いた。
「沙耶の言う通りだよ。オレは1人の女じゃ満足出来ないんだよ。だけど沙耶の事好きな気持ちは本当なんだ。今、オレの中で沙耶が1番なんだ。だけど今の女ともきっと別れられない。だから沙耶がオレの所に戻って来てくれてもオレは前と同じ事をして沙耶を悲しませる。それなら付き合わない方がいいね…。勝手な男でごめんね」佑が申し訳なさそうに言った。
「もういいよ。佑のおかげで私、少し大人になった気分だもん」と言って笑った。
佑も
「これから沙耶がどんどん綺麗になって行くのが見れないのは残念だな」と寂しそうに笑った。
「同じ地元だもん会わない事ってないと思うよ？」
「確かにそうだな」と二人で笑った。最後の夜は二人で手を繋いで寝た。朝は学校の近くまで送ってもらった。あまり人目がつかない場所で降ろしてもらう。
「じゃあね、佑。元気でね。」
「うん沙耶もね」お互い少し寂しい声で言った。
「あまり彼女を泣かせないでね。早く1人の事だけ好きになれる人になってよ？」と言うと

「ハイ…」
と苦笑いをした。
「沙耶…寂しくなったら電話していい？」佑が寂しそうな顔で言った。私は
「いいよ。話し相手ぐらいにはなってあげるよ」と笑った。佑の顔も明るくなった。
「じゃあもう行くね。」
「うん。じゃあね」そう言って佑は車を走らせ、私は学校に向かった。佑とはすごくいい別れ方が出来たと思う。
「さて、もう１つ何とかしなきゃ」
私は快晴君と別れる事を決心していた。

第7話～別れ～

昨日の夜、佑と肌を重ねていた時に電話が来ていた。
快晴君からだった。私は出なかった。まぁ、正確に言うと出られなかったのだが…。
私は今回ほど、押しに負けて付き合った事を後悔した事はなかった。
今まで付き合った人は最初はお互い軽い気持ちでその場の流れで付き合おうって感じだったが、快晴君の場合は違った。
本当に私の事を想ってくれていた。だけど私はその真剣な気持ちにいくら押しに負けたとはいえ、中途半端な気持ちで付き合って、そして裏切った。最低な女だ。
このままでいい訳がない。きっと昨日電話に出なかったから快晴君も私の気持ちに気付いてるハズだ。
今日の夜ハッキリ快晴君に言おう。

学校を終えてバイトに行く。
弥生に昨日の事を謝り、昨日あった事を全部話した。弥生は
「佑君との事はあんたの出した答えは間違ってないと思うよ。後は快晴君の事、ちゃんとしなさいよ。」
「…はい。」弥生に言ってスッキリした。
「ところで…」と弥生がまた話しかけてきた。
「相変わらず佑君エッチ上手だった？どうやってしたの？」ニヤけて言ってきた。
弥生は処女だ。綺麗なのに理想が高い為なかなか彼氏が出来ない。。しかしエッチにはものすごい興味津々だ。私の初体験は高校1年生だった。それからというもの弥生は必ずエッチな事は私に聞いて来た。綺麗な顔をしてるのにそういう話を私に積極的に何でも聞いて来る。そのギャップがたまらなく可愛い。
私は昨日の佑とした時の事を詳しく教えると

「キャー！キャー！」と照れながら興奮している。恥ずかしいのはこっちなのだが。
高校生の時は女同士での話しと言えば彼氏の事、エッチな事。ほとんどそれしかなかった。自分の経験した事を１から１０まで全部発表し、やれここは気持ちいい、やれここは感じないだとかエッチ体験の発表会をしょっちゅうしていた。
言われてる男はたまったもんじゃないけど…。
「弥生も早く彼氏作って弥生のエッチ話し聞かせてよね！」
そう言うと
「だっていい男いないもん」と口を尖らせる。
話しに盛り上がっているともうバイトの終わる時間だ。
「じゃあ快晴君の事ちゃんとしなよ」と言って弥生は帰った。

私は家に帰り、いつものようにご飯を食べてお風呂に入る。

そして自分の部屋に戻るとすぐ電話を持った。
「ハッキリ言わなきゃ」
私は快晴君に電話をかけた。
「…もしもし」
快晴君が暗い声で出た。普段私から電話をかける事がないのでいつもの快晴君ならきっと喜んで電話に出ていたハズだ。しかし快晴君も気付いてるいるんだろう。そんなテンションはなく、私が話すのを黙って待っていた。
「快晴君…昨日電話に出られなくてごめんね…」私は昨日電話に出られなかった事を謝った。
すると快晴君は
「別に、大丈夫だよ」と優しく言ってきた。
「どうして出なかったの？」と聞かれると思ったのに快晴君は何も聞いて来なかった。
「どうして出なかったか聞かないの？」と私から快晴君に聞いた。

そしたら快晴君は
「きっと、それを聞いたらオレがすごくショックを受けるような気がするから聞かない」きっと快晴君も気付いてるんだと思った。
私は快晴君を裏切って傷つけてしまった。
ハッキリ別れを言わなきゃいけない。
「快晴君、あのね…」といいかけた。すると快晴君が
「……別れよう？」
快晴君から言ってきた。
「えっ…」
私は驚いた。
「かんちゃん前からオレと別れたいと思ってたでしょ？だから別れよう？」
快晴君は私の態度で自分に気持ちはないとわかっていたけど、私の事が大好きだから何とか自分の事を好きになって欲しくて諦められなかったと言った。
私は昨日の佑との事を今になって初めて後悔した。（こんなに自分の事を想ってくれてる人がいるのに何してるんだろう…。これじゃあ佑と一緒じゃない。）
「快晴君…ごめん…本当にごめんね…」
私は心から快晴君に謝った。
「もういいんだ。…でもオレずっとかんちゃんの事好きだから。じゃあね」そういうと電話を切った。

「快晴君…」
快晴君は私の事をずっと好きだからと言った。こんな自分勝手で最低な私のどこが好きなのだろう。快晴君に対する罪悪感は消えないが、心はスッキリした。

第8話～通じあった気持ち～

あれから1週間が経った。
まだ停学処分を受けている快晴君は学校に来てない。
実は快晴君と別れた次の日から、また毎日電話が来ている。
「かんちゃんもう1回付き合ってよ、すごい好きだから」
付き合う前と同じ事を言っている。
別れてすぐの頃はどうして毎日かけてくるのよと少しうっとおしい気持ちもあったが最近では何だか慣れて、話しをするのも楽しくなってきた。
前よりも気を使わないで話すことも出来るようになった。
たった10日間しか付き合ってなかったけど、今思い出すとあの時本当に快晴君は自分の事を好きでいてくれたなと思い返す。
しかし快晴君の気持ちは今も変わりなく私の事を思っている。
私は
「ねぇ、どうしてこんな私の事好きだって言ってくれるの？私は最低の女だよ？平気で快晴君の気持ち裏切ったんだよ？」
と言うと快晴君は
「かんちゃんは悪くないよ。確かに最初は
（何だよ畜生！絶対元カレのせいだ！）

って思って元カレをボッコボコにしてやろうと思ったけど
、よく考えてみるとさ、付き合う時だってオレが無理やりかんちゃんに（うん）って言わせたようなもんだし、オレの努力が足りなかったからかんちゃんの気持ちをオレに向ける事が出来なかったんだ。だからかんちゃんは何も悪くない。」

…何て子なんだろうと思った。

私は快晴君と付き合っているにもかかわらず、元カレの佑とヨリを戻そうか悩み、
挙げ句の果てにエッチまでしてしまって快晴君を裏切った。
しかも、私がまだ佑に未練があった事を気付いていた。
それなのに快晴君は…

「ありがとう」

それしか言えなかった。素直に嬉しかった。
それからも毎日快晴君から電話が来た。

私はまた、快晴君からの電話を待つようになった。
いつもの時間にかかって来ないとすごく不安になった。そしてかかってくるとすごく嬉しくなった。

ある日快晴君が
「かんちゃんあのね、オレ族復活させるの止めたよ。」
と、言ってきた。

「えっ！？だってあんなに楽しそうに族を復活させるって言ってたのに…どうして？」

あの時快晴君は本当に嬉しそうに族を作る事を私に話してたのに。
「だってかんちゃんに嫌われたくないもん」
「えっ？……私の為に？」私は驚いた。
確かに付き合ってる人が暴走族なのは嫌だとは言ったけど、私と快晴君は今付き合ってない。
これから先も付き合うかどうかもわからないのに、私に嫌われたくないからと言う理由だけであんなに楽しみにしていた事を止めただなんて……。
私はすごく幸せな気分になった。
こんなに自分の事を好きなんだと実感できる人が今までいただろうか。
そう思うと私の胸が（ドキン）と音をたてた。
（あっヤバい。好きになりそう）
私という人間は何て自分勝手なのだろう。
本当に最低だ。
今ごろ好きになってどうするの？
快晴君は私の事を今でも好きだと言っている。だからここで私も快晴君に好きだと言ったら全て丸く収まる。
しかしそんな都合良くいっていいものだろうか。
勝手な事して快晴君を傷つけて、それで好きになったなんて…。

私はすごく悩んでいた。

あれからも毎日電話が来る。話せば話すほど快晴君の事が好きになっていた。

今日からまた快晴君が学校に来る。私は会えるのが楽しみでしかたなった。

放課後になっていつもの待ち合わせ場所に行く。

待っている間につい2週間前の事を思い出していた。

付き合っていたのにここに来るのが憂鬱で仕方なかった。

まさか、別れた今、こんなに快晴君に会う事を楽しみにしているなんて思ってもいなかった。

（あ～早く来ないかな～。）

と、思っていると物凄い緊張してきた。

すると

「かんちゃん！」

（来たっ！）

久しぶりに見た快晴君は

（…カッコイイ☆）

初めて快晴君を見た時も確かにカッコいいと思ったが、好きになって改めて見ると何故か初めて見た時の何十倍もかっこよく見える。

もう完全に快晴君にハマっている。

「久しぶりだね！かんちゃん顔赤いけど大丈夫？」と、快晴君の顔が近づく。

「だ、大丈夫だよ！久しぶりだね！」

（あービックリしたぁ…。顔近いから！）

もう私に余裕などない。

キスだって二回しているのに、顔を近づけられただけでもうゆでダコ状態。

何か話さないとと思うと緊張して何を話していいのかわからない。

逆に付き合ってた時あんなに緊張していた快晴君が今までと変わってすごい積極的に話しかけてくる。

そしていつもの公園に行く。

この前佑と会った公園。

あの時佑とヨリを戻すか悩んでいた自分が今では佑の事なんてすっかり忘れてしまっている。

それだけ今は心の中に快晴君がいるのだ。

「あー、かんちゃん！やっと会えたぁ。すっごい会いたかったよぉ。

どうしてそんなにカワイイの？」

公園のベンチに座るなりいきなりくっついてきた。

「な、何言ってるの？全然可愛くないから！そんな恥ずかしい事言わないでよ。」

真っ赤な顔をして少し体を離す。だけど、また快晴君は私に近づいて来て

（本当カワイイ！）

とじっと私を見ている

。

耐えられなくなった私は立ち上がった。

そして

「ねぇ、どうして私なの？もっといい女なんていくらでもいるでしょ？私は快晴君に好きになってもらえるような女じゃないんだよ？」

と真面目な顔で言った。

快晴君の事を今更好きになってしまって、ここで

「じゃあ違う女の所に行く」

と言われるのもショックだか、私には何も言う資格がない。

快晴君はうつむいてる私の前に立ってキュッと私の手を握った。

「かんちゃん？オレ、前にも言ったでしょ？前の事はかんちゃんの
気持ちをオレに向かせられなかったオレの責任なの。
だからかんちゃんは前の事は何も気にしなくていいんだよ？そのかわり
これからオレはもっと頑張って、かんちゃんがオレの事を好きになってもらえるように頑張るから、
これからのオレを見てほしいんだ。ねっ？
他の女なんていらないよ。
オレはかんちゃんがいいんだから。
かんちゃんと付き合いたいんだ。」

…快晴君はニコッと笑って言った。

泣きそうになるのを必死にこらえた。

うつむいたまま頷いた。

それから毎日バイトまでの時間を快晴君と過ごした。

私はやっと皆に
「好きな人が出来た。」
と言った。

皆は

「ヤッパリ、あの子でしょ？」

と授業で一階に行く度に快晴君を見つけては冷やかされた。

でもやっと皆に言えたのが自分ですごくホッとした。
皆も私に好きな人が出来た事をすごく喜んでくれた。
ある日、放課後いつもなら公園でデートなのだか、快晴君が私を自分の教室に連れて来た。
隣の席の椅子を借りて向かい合わせで座った。
「かんちゃんに今日は話しがあるんだ。」
改まって快晴君が私に言ってきた。
「どうしたの？」本当は何の話しかわかっていたけど、緊張して知らないフリをしてうつむいた。
「あのね、かんちゃんと別れてから3週間くらい経ったと思うんだけど…」
「…うん。」
「別れてからオレなりにかんちゃんに好きになってもらおうと結構頑張ったんだけど…」
「うん…」
「あれからかんちゃんも随分とオレに心を開いてくれたと自分で思ってるんだけど…」
そういいながらうつむいたままの私の顔を覗きこんだ。「そうだね。

」

顔を赤くして言った。

「だからここでもう1度かんちゃんに告白しようかなと思って」

（来たっ！）

さっきより心臓の音が大きくなるのがわかった。

「…かんちゃん。オレ本当にかんちゃんの事が大好きです。だから
もう1度オレと付き合ってください。」

初めての告白は電話だった。

だから快晴君の顔は見れなかったけど、
2回目は今こうして私の顔を見て言ってくれた。一度付き合ってす
ぐフラれた相手にもう1度告白しているのだ。

最初の告白より何倍も緊張してるだろう。

私は快晴君の顔を見た。

やはりすごく不安そうな顔をして私を見ていた。

しばらく私は黙っていた。

「…ダメ？」

切ない顔で言ってきた。
私は嬉しくてたまらない気持ちを押さえて快晴君に言った。
「今の私の気持ちを言うね。」
快晴君はうんうんと頷いて黙って私を見ていた。「最初ね、私本当にいい加減な気持ちで快晴君と付き合ったんだ。…あまりにも積極的だった快晴君に負けて。」
快晴君はうんと言って聞いていた。
「そして私は快晴君の気持ちも考えないで快晴君を悩ませて別れようって言わせてしまったの。
あんなに私の事想ってくれてたのにそんな言葉を言わせてしまった事をすごく今は後悔してるの。」
「…その事は…」
と、快晴君が言ってるのを止めて私は話しを続けた。「…快晴君がその事はもういいと思ってくれてると思う。
でも私、快晴君に心からまだ1度も謝っていないの。
…私がいい加減な女で快晴君を傷つけてしまって本当にごめんなさい…。」
私は頭を下げて謝った。
「うん。わかった。…わかったよ。」
と優しく笑った。

「快晴君と別れて、元カレへの気持ちもハッキリさせて、ちゃんとゆっくり考えたの…。だけど考えれば考えるほど快晴君の事を思い出しちゃって…。そして…話すと話すほど快晴君の事…好きになって行ったの。そしていつの間にか快晴君の事しか考えられなくなっちゃった…。」

やっと言えた。

私は顔を真っ赤にして気持ちを伝えた。

その瞬間……

（ガタンッ）

「まじでっ！？」

快晴君は椅子を倒して立ち上がった。

「本当っ？かんちゃんオレの事好き？好きなの？ねぇ！本当！？」

興奮しながら私に聞いてくる。

「うん。好きだよ。こんなに私の事想ってくれるの快晴君だけだもん☆

…だから私も負けないくらい快晴君の事もっともっと好きになるから。

こんな私の事ずっと好きでいてくれてありがとう…。これからは恋人同士としてヨロシクね☆」

そう言うと快晴君は本当に嬉しそうに

「ヤッター！！」

と言って抱きついて来た。

私は今までにないほど、幸せな気持ちになった。

快晴君はキスをしようと顔を近づけてくるが

「ちょっと待って！」

快晴君の顔の前に手をつけた。

「…ここ、教室の真ん中だしさ…ほら、ここから職員室見えるから…」

そう言うと

「えぇ～、いいじゃん見られたってぇ～。」

と、不満そうに言う。

「あっ、そうだ！」

と何か思い付いたようにニヤッと笑い、私の手を掴み教室を出た。

「ここなら大丈夫でしょ☆」階段の横のちょっと奥ばった所に私を連れて来て、そう言うとギュッと抱き締めてキスをした。

「あーっ！やっとかんちゃんと本当のチューが出来たような気がする」

そう言って笑った。

私も

「今のチューはちゃんと気持ち入ってるもん」

と言って二人で笑った。

そして、バイト先まで手を繋いで歩いた。

実は今まで快晴君が自転車だったので手を繋いで歩いた事が無かった。手を繋ぐのがこんなに緊張するとは思わなかった。

（大きな手…）

…何だかずっと繋いでいたいと思った。

バイト先に着いて

「じゃあまた明日ね☆夜電話するからね～☆」

と言って快晴君は帰った。

快晴君と私の心がやっと通じた。

ここから二人の恋が始まった。

この先、二人に色んなドデカイ壁が立ちはだかろうとはまだ、今の二人には知る由もなかった…。

第9話～ヤキモチ～

快晴君とヨリを戻して1週間が経った。

グループの皆には付き合った次の日にきちんと報告した。

「よかったじゃ～ん！あの子かっこいいしさ～！なんか今までの人とはちょっと違う感じがするし！頑張ってね☆」

皆すごく喜んでくれたが

「じゃあ、彼氏いないの私だけだぁ…。なんか寂しい…。」

と、1人だけ彼氏のいない佳乃が言った。

佳乃も弥生と一緒で、すごく綺麗なのだが、佳乃の場合は付き合うのが面倒みたいだ。

「でも佳乃は彼氏いらないんでしょ？」

と言うと

「まぁね、面倒臭いもん。…かんちゃん、彼氏出来ても普通に遊ぼうね。」

と言って来たので

「当たり前じゃん！遊ぼ！」

と、何故か抱き合った。

快晴君とは相変わらず公園デートをしている。

毎日毎日、
「かんちゃんカワイイ！」
「まじ好き！」
そんな事ばかり言う。

「あんまり好きとか言われるとだんだん嘘っぽく聞こえるんですけど…」

少しイジワルを言ってみた。
そしたらものすごい焦って

「ちっ、違うよ！本当にかんちゃんの事好きなんだもん！だから好きって言っちゃうんだもん…」

シュンとしてる快晴君を見て、カワイくてしょうがなくて

「冗談だよっ！ちょっとイジワルしてみたの！ごめんね？」

と、快晴君の腕に抱きついた。「も～！本当にそう思われてたらどうしようと思ったぁ！」

ホッとしてる顔をみて
（なんか平和だな～）
としみじみ思った。

そんなある日。

その日はバイトが休みだったので、とりあえず教室で話をしてた。
放課後はカップルがよく教室に残って話をしていた。
私の教室には早苗と早苗の彼氏がいたので快晴君の教室に行く事にした。
しばらくいつものように話をしていたら快晴君の電話が鳴った。
「知らない番号だ」
と言って電話にでた。
「もしもし」
…相手はなにも言ってこないらしい。
「おい、誰だよ。」
少しイラッときたのかちょっと強い口調で言った。
「……桜井？」
（女の声だっ！）
「おぅ。お前誰？」
「えっ？本当に桜井なの？ラッキー☆」
さっきより興奮してるのかその女は嬉しそうに話している。
「だから誰だって聞いてんだよっ！」

快晴君は誰だかわからない相手にキレ口調で言った。

すると

「……ブツ……」

相手が切ったらしい。

「意味わかんねぇ、なんなんだよっ！」

と、怒っていた。

「…心当たりないの？」

と聞くと

「全然ない。オレかんちゃんと1回目に付き合った時に連絡取ってた女全部切ったんだよね。一応番号とかは消してないからそいつらではないし…。」

「えっ？そうなの？何で？」ビックリして聞くと

「何でって言われてもなぁ…。ただかんちゃん以外の女はいらないから…？かな…」

当たり前のように言っている。

私は普通に男友達とかと電話してるんだけどなぁ…。

（なんか嫌とか言われそうだから黙っとこ。）

だけど、そう思ってくれている気持ちは嬉しかった。
「すごい嬉しいんだけど…。だけどさっきの女は誰なんだろうね。」
「本当だよ、気持ち悪りぃ」
私も気になる。
名前も言わないで快晴君と話して喜んでいた。
（もしかしてライバル！？）
そう思うとますます気になる。
帰りは快晴君が少しだけ送ってくれた。
家と快晴君の家は正反対の所にある。
快晴君はここからバスで４０分くらいの所に住んでいる。
前までは自転車だったが最近はバスで通学している。
私は地元だから比較的近いが、それでも歩くと家まで２０分くらいかかる。
とりあえず途中まで送ってもらい、
「また明日ね☆」
とバイバイのキスをして別れた。
私は家に帰り、部屋で寛いでいた。
すると快晴君から電話が来た。

いつもなら夜にかかってくるのに
（どうしたんだろう？）
と思い電話に出た。

「どうしたの？」

もしもしも言わずに聞くと

「またさっきの奴から電話来たよ！名前言わないし誰かわかんないんだけど、同じ学年の奴らしいんだ。」
「快晴君何か言われたの？」

「いや、何かカッコイイとか、３年生の彼女と早く別れてよって言われた…」

「はぁ？なんなのそいつ！」

私はムカッときてついつい荒い口調になった。

「かんちゃん怒らないで…。オレがちゃんとキレといたから。」

と私を落ち着かせようとするが私はすごいムカムカしていた。

私の他に快晴君を好きな奴がいるなんて…

確かに快晴君はカッコイイ。
甘えん坊だが、それは私の前でだけなので、他の女子にすれば
（クールでカッコイイ）
と思われているハズ。

自分の彼氏がモテるのは悪い気はしないが、こういう自分の名も名乗らず、ストーカーっぽい行動をするのは許せない。

「とりあえずソイツの番号教えてくれる？」

そう言って快晴君からその女の番号を聞いて

「皆にこの番号知ってるか聞いてみる。」と言って電話を切った。

私は何故か1年生の女子から慕われていたので、快晴君からの電話を切った後すぐに

（この番号誰か知ってる人いたら教えて）

と、その子達にメールを送った。

すると、すぐに真希という子からメールが返ってきた。

「その番号同じクラスの藤井奈央って奴の番号ですよ！」

と返ってきた。

「ハァ？藤井？」

友達ではないが、そいつの事は知っている。暗いグループの中の1人で、髪はボサボサ、化粧には全く興味がなさそうな感じなのにスカートは人一倍短くして今どきっぽくしていて、周りからは勘違いしてると思われている奴だった。

3年生の私達にもガンを飛ばしてきたりしてたので、みんなソイツ

の事を知っていた。

「なんでアイツが快晴君の番号知ってんのよ…」

と独り言を言いながら真希を含めて返事をくれたみんなに

（サンキュー）

とメールを返し、藤井に電話をかけた。

「もしもし？」

藤井が出た。

「アンタ1年の藤井でしょ？」

と言うとすぐ電話を切られた。

「何なのこいつ～！ムカつく～！」

平和主義の私でも流石にこういう奴には腹が立つ。

まぁ、ただの焼きもちだけど…。

快晴君に電話をして、電話の相手が藤井だと教えた。

「ハァ？何でアイツがオレの番号知ってんの？意味わかんね～。」

快晴君も藤井の事が大嫌いだったらしい。

明日、朝イチで藤井を呼び出そうと言って電話を切った。

私はその日ムカムカしながら寝た。
こんなに自分がヤキモチ焼きとは思わなかった。
次の日、学校に行くと早速藤井を見つけた。
私は藤井の前に行くと
（お前藤井でしょ？ちょっと来て）
そう言うと、藤井は泣きそうな顔で私の後をついてきた。
快晴君も今日は早く来ていたので、私は1階のろうかの端に藤井を連れてきた。
「あんたどういうつもり？」
最初に私が言った。
「お前、何でオレの番号知ってんの？」
すると藤井は口を開いた。
「…友達に聞きました…」
小さい声で言った。
藤井は快晴君の番号を友達に聞いたと言っていた。
そしてその友達は快晴君の番号を知りたくてクラスの男子の携帯を勝手に見て快晴君の番号をメモったらしい。
「もう二度とかけてくんなよ。後、その友達の名前も言え」

と言ってその友達の名前を聞いて藤井を帰した。
そして、真希達のクラスに行き、藤井の友達を聞き出し、呼んでもう二度とこんな事をしないように言った。
勝手に携帯を見たのは快晴君の友達の携帯だったので、これ以上私達が何も言わなくても、その友達は快晴君の友達にこてんぱんにやられ、藤井も真希達に
「桜井はかんちゃんの彼氏なんだから今度桜井に何かしてかんちゃんに嫌な思いさせたらあんたマジでボコるよ」
と脅したらしい。
それからもちろん藤井から電話は来なくなった。
いつものように公園で話してると
「あの時のかんちゃん格好良かった！正人とか他の奴らもかんちゃんって実は怖いんだなって言ってたよ」
別に怖くはないと思うけど…。
でもやっぱり怒る事は誰にだってあるし…　それに…
「だって…、嫌だったんだもん。あんな奴と快晴君が仲良くなったらとか思ったら…」
「何言ってんの！？オレあいつの事大嫌いだし、仲良くなるわけないじゃん！」
「そうだけど！もしかしたらって事が…」

と話してる途中で快晴君が抱きついて来た。

「だからぁ、何もないよ！オレはかんちゃんだけなんだから！」

と言って私も快晴君の背中に手を回して

「うん」

と言った。

「かんちゃんってさ、けっこうヤキモチ焼きなんだね」快晴君が笑って言った。

「今まで気付かなかったけどそうなのかも…」

藤井との事は自分がすごくヤキモチ焼きだというのを初めて知った出来事だった。

第１０話～休日～

季節は夏、夏が短い所に住んでいる私達にとって貴重な夏休みが来た。

今日はバイトが休みで初めて快晴君の家に遊びに行く。

「早く会いたいから早く来てね！」

快晴君のワガママで早起きをする。

お母さんには

「友達の家に遊びに行ってくる。」

「友達って誰？」

「真実だよ。」

「フーン……。随分早い時間に行くんだね……早く帰って来なさいよ。」

「わかったよ。」

と、嘘をついた。

お母さんにはまだ彼氏が出来たと言っていない。

２つ年下の子と付き合ってると知ったらきっと

「年下なんて！」

そう言ってきっとまた反対され無視されると思ったから私はしばらく黙ってようと思った。

「お父さん、バス停まで乗せてってくれる？」

そう言ってバス停まで乗せてもらうと

「サンキュー」

と言って降りた。

「フー、これでまず一安心。後は快晴君の家に向かうだけ！」

そう1人で呟き、バスを待つ。

親に嘘をつくのは初めてじゃない。嘘をつくのは嫌だけど、やっぱり言っても認めてくれないに決まってるし。悪いとは思うけどヤッパリ快晴君に会いたいし。

初めての快晴君の家。ドキドキが止まらない。

家に行くと言う事はもしかしたら…そういう事をする可能性もある。

（キャーッ！どうしよう！緊張する～。）

実は昨日からそんな事ばかり妄想してなかなか眠れなかった。そしてまた妄想して1人で顔を赤くしながら興奮しているとバスが来た。

バスに乗るとまた1人で妄想しては顔を赤くした。

（私って絶対変態だ…）

バカだなぁと思いながらバスに揺られ、２０分。

「次は、亀井町～亀井町です。」

「あ、ここで降りなきゃ。」

快晴君の家までバスで４０分だと聞いていたけど、ここで降りるように言われたので降りた。

降りるとそこには快晴君の姿があった。

初めて見る快晴君の私服姿。ジーンズを腰ではいてＴシャツ姿がとても似合っていた。

（…カッコイイ…）

心でそう思いながら

（おはよう！）

元気よく言って快晴君に近づく。

「おはよう！」

まだ眠そうな顔をしている。

時間はまだ朝の８時だ。普通の休みならまだ寝ている時間だ。

「快晴君眠そうだね。」

私が言うと

「かんちゃんが家に来るって考えてたら全然寝れなくてさ…」
照れ臭そうに言った。
「え～、私もだよ。1人でいろんな事考えて全然寝れなかったよ。」
「何考えてたの？」
その質問に私は
「え～？ナイショ☆」と、答えて話を変えた。まさかイヤらしい事を1人で妄想してただなんて絶対言えない。
「快晴君の家ここから近いの？」
とりあえず話を変えて聞くと、
「ここからはまだ遠いよ。少し歩いてまたバスに乗るんだ。」
快晴君の家は丘の上にある住宅街に住んでいるので上に上るバスに乗らなければならないらしい。バスを降りてから上に上るバス停まで歩くと２０分くらいかかる。そこまで2人は歩いた。
普段は私がバイトの時間までしか一緒にいれないから、私服で市街を歩くのは初めてでとても新鮮だった。
「なんか私服でこういう所歩く事ないから少し緊張するね？」
私が少し照れ臭そうに言うと。
「本当だね。なんか嬉しいね☆普段あんまりこういう所歩けないし

ね。」

「ゴメンね？いつもバイトバイトで、全然遊べなくて。」

私が謝ると

「何言ってんの？かんちゃんはエライじゃん！毎日バイト頑張ってるのオレすごい尊敬してるんだから！言ったでしょ？ちょっとでもかんちゃんと一緒にいれればいいんだからさ☆でも、バイトが休みの日はいっぱい遊ぼ？」

と言って笑うと繋いでいた手をギュッと強く握った。

「ありがとう☆」

私もギュッと握り返した。

話をしながら２０分くらい歩いた。

「けっこう歩いたね～。」

「オレ家すげ～不便なんだよね。ゴメンね？もう少しでバス停だし、とりあえずコンビニでなんか買って行こう☆」

そう言ってお菓子やら飲み物やら食料を買ってバス停に向かった。

少し待つとバスに乗り込んだ。

（いよいよ快晴君の家…あ～、緊張する…）

そんな事を考えてると

「かんちゃん、
降りるよ！」
そう言うと座席から立ち上がった。
「えっ？もう？」
私は快晴君の後に着いて行き、お金を払いバスを降りた。
「バスだとあっという間なんだけど歩くと上り坂だし結構時間かかるんだよ」
たしかにすごい急な坂道だった。あそこを歩くのはかなりキツイと思った。
私は周りを見渡した。
「あっ、ここ…」
バスを降りるとすぐ向かいに見えたのは何件も並んでいるラブホテルだった。
「オレの家すぐそこだから。」
バス停から5分くらい歩くと
「ここだよ。」
立派な家だった。だけど真向かいにはラブホテル…
「すごいね、快晴君家。ラブホの真向かいじゃん…」
「そうなんだよね、だから夜は部屋真っ暗にしてもピンクの光で部屋が明るくなるんだよ。」そう言って笑った。

私は何だか感動してずっと
「すご～い」と連発していた。
何がすごいのかは、わからないのだが…

玄関のドアを開ける。（親はもちろんいるよね…こんな朝早くにとか思われるかな…怖いな…）
ドキドキしながら玄関に入る。

大きい声で

「お邪魔します！」

と言うとすぐ

「は～い！」

と言う声と足音が聞こえると、リビングらしい部屋のドアが開いた。

「はい、まぁ！いらっしゃい。快晴の母です。」

目の前に現れた快晴君のお母さんはとても若くて綺麗だった。私は緊張しながらも

「初めまして、管野と言います。お邪魔します。」

と言ってお辞儀をした。

「あらっ！礼儀正しい子ねっ。快晴の彼女？」

ニヤッと笑いながら快晴君に聞いた。
快晴君は
「うるせーなっ、別にいいだろっ！」
と言って階段を上がった。
快晴君のお母さんは
「フフッ照れちゃって」
と言って笑っていた。
私はお母さんに
「失礼します」
と言って快晴君の後をついて言った。後ろから
「ごゆっくり～☆」と言うお母さんの声が聞こえた。
初めて入る快晴君の部屋。普通の男の子の部屋だが、きちんと掃除をしていてとてもキレイだった。
私の知っている男の子の部屋は、タバコの灰がその辺に落ちていたり、布団も畳まないでそのままで、空き缶などかたくさんあるようなイメージしかなかった。少なくても今まで付き合ってた人はみんなそんな人達だったから、とても感心した。
「すごいキレイにしてるんだね。」

私が感心しながら言うと

「かんちゃんが来るからと思ってめちゃめちゃ掃除したからね。まぁ、掃除とかキライじゃないし」

と照れ臭そうに笑った。

「いや、いい事だよ！キレイな部屋って気持ちいいもんね☆」私は自分が掃除とか苦手だからすごく感動した。

「まぁ、とりあえず座って。フローリングで足痛いと思うから布団の上に座っていいよ」

私は畳んでいた布団の上に座った。

（…布団の上に座っちゃった…）

また1人で何となく布団の上に座るのは抵抗があったが私はそこに座った。

座った途端、

「かんちゃ～ん。会いたかったぁ！何でオレの家にいるのぉ？信じられない～。」

いきなり抱きついて来て甘え始めた。

「ね～☆変な感じだねぇ！来ちゃったよ。」

と言って笑った。

部屋の周りを見渡してある場所に目がいった。

部屋のクローゼットの扉の下に小さく何か書いてあった。
（かんちゃん、たった2週間だったけどすごく楽しかったよ…ありがとう…）
という文字だった。

「快晴君…これ…」

「あー、かんちゃんと別れた時に友達と一緒に書いたの。友達も彼女にフラれちゃったから。」

その横には快晴君の友達が書いた彼女への別れの言葉があった。

「何かこういうの見ると…本当に私の事好きでいてくれたんだね。…でも何でクローゼット？」

私が笑いながら聞いた。その時はそこに書きたかったらしい。

そんなこんなでしばらく2人で話をしたり快晴君の昔の写真など見ていた。ちなみに一緒に写ってる友達はみんなヤンキーだった…。

「男ばっかじゃん。女の子の写真とかはないの？」と聞くと

「あー全部捨てたもん。」

とサラッと言った。

「写真は思い出なんだから取っておきなよ～。」

私は写真を見ながら言うと、見ていた写真を私から取ると

「だってぇ～かんちゃんとの思い出だけでいいもん☆いっぱい写真とかプリクラとか撮ろうね～」

とまた抱きついてきた。

最初甘え坊なんて嫌だと思っていたが、今ではそんな快晴君が可愛くて仕方がなかった。

「はいはいわかったよ。後でプリクラ撮りに行こう。」

と言うと

「ヤッター！初プリだぁ！」

と1人で大はしゃぎしていた。

「それよりさ、快晴君ってお母さんと仲良くないの？スゴい若いね～。」

と言うといきなり態度が変わった。

「別に、ただ話すこともないし、ああ見えてすげぇうるさいんだよね。タバコの事とかすげぇうるさいし…」

と愚痴っているが親としては当然な事なんだけど…。どうも反抗期らしい…。なのでお母さんの話しはそれ以上聞かない事にした。

快晴君は機嫌も直りずっと私に抱きつきながら話をしていた。

するといきなり

「あぁっ！もう我慢できない！」

そう言ったと思ったらいきなり押し倒された。

「ちょ、ちょっと快晴君！」

正直期待はしていたけど、いざそうなるとものすごくパニクってしまう。

しかしいくら年下とはいえ、力ではかなわない。しっかり押さえつけジッと私の顔を見ていた。

私は恥ずかしくてたまらない。

「どうしてそんなジッと見てるの？」

と聞くと

「もうかんちゃんの事好きで好きでおかしくなりそうなんだもん。スゴいカワイイ…」

と言うとキスをしてきた。私は快晴君を受け入れようと決めた。

畳んでいた布団が落ちてきて、その上に寝かされ、またキスをした。手は私の胸に行き、キスが終わると口は首筋に行き、次は耳をかじり、とても手慣れた感じだった。

快晴君の初体験は中学2年生の時だったらしい。今の子は早いなと思っていた。2才しか違わなくても私達が中学生の時は回りに経験

者は1人もいなかったからだ。

私は服を脱がされた。

「かんちゃんの肌真っ白ですごいキレイだね。」

さすがに昼間だ。どんなにカーテンを閉め切っても全部丸見えだ。

「恥ずかしいからあんまり見ないでよ…」

と布団で体を隠すと

「あー、かわいすぎる！」と言いながら自分も服を脱いだ。

初めてみる快晴君の体。とてもたくましかった。腕も太く肩はガッチリし、腹筋は割れていた。

そのたくましい体がまた私の上に覆い被さって来た。たくましい体に弱い私はドキドキの最高潮だ。

手慣れた手つきで私を感じさせると、いよいよ

「かんちゃん入れていい？」と聞いてきた。

私が

「いいよ」と言うと快晴君の大きなモノが入ってきた。

「い、痛いっ！」

快晴君のモノはすごく大きくて太かった。私の大事な所に快晴君のモノがなかなか入らない。というか本当に痛くて痛くて

「これ以上入れたら死ぬっ！」と言うくらい痛かった。

「かんちゃん、大丈夫？まだ先っぽしか入ってないんだけど…」
「ウソ…もう半分以上入ってんのかと思ってた。もう、無理かも…
痛くて死んじゃいそう…」
あまりに私が辛そうな顔をしていたので快晴君は
「じゃあ止めよう。」と言って抜いた。
快晴君にとってはこれほど辛い事はないが、どうしてもあれ以上は
無理だと思った。
私はひたすら謝った。こんな事は始めてだったし…
大きすぎて入らないなんて…
まさに（どんだけ？）という気持ちだった。当時はそんな流行語は
なかったが……。
「本当にごめんね…」
何度も謝る。
「うん…。もう大丈夫！しょうがないよ！また今度しようね！」
落ち込んでいた快晴君も元気になり、
「よし、じゃあプリクラ撮りに行こうか！」
そういうと準備をして快晴君の部屋を出た。
「お邪魔しました！」
「は～い、また来てね～！」
お母さんがリビングから大きな声で言ってくれた。

「はいっ！」

と返事をして家を出た。

この辺は上に上るバスも下に下るバスも1日3回しか通らない。

午前中は8時代のバスが1本。午後は13時代と19時代の2本だけ。

バスの時間が合わないので快晴君の自転車で行く事になった。

真夏に自転車で下り坂を降りるのは最高に気持ちよかった。

ゲームセンターに行ってプリクラを撮る。

なんだか恥ずかしかったけども、初めての記念のプリクラだ。快晴君も嬉しそうで、そんな満足そうな顔を見て私も嬉しかった。

楽しい時間はあっという間に過ぎる。私は帰りのバスの時間を見る。私の住んでる所は市内の外れにある為、バスの時間もあまりない。1本逃したら2時間は待たなきゃいけないし、自宅の近くにはバス停がないので、お父さんに迎えに来てもらわなきゃない。だからあまり遅い時間には帰れない。

時間は19時…

「本当に帰っちゃうの？…寂しい…」

快晴君がシュンとしている。

「ごめんね？私もまだいたいよ…でも家も交通不便でさ…。また来

週くるから、ね？だから元気だしてよ。」
快晴君の顔を見て言うと

「うん。仕方ないもんね！今日はすごい楽しかったし！エッチ最後まで出来なかったのは切なかったけど…。また来週来てね！」
バス停でそんな話しをしているとバスが来た。

「あっ、バスが来た。じゃあまた来週来るから！バイバイ！」

「うん！家着いたら電話してね！バイバイ」

そう言ってバスに乗った。快晴君は外から周りに人がいるが恥ずかしそうに手をふった。
私も小さく手をふり、バスが出発した。バスに乗りながら今日の事を振り返った。エッチが最後まで出来なかったのは私も残念だったが、今日は久しぶりにすごく楽しい満喫出来た休日だったなと、バスの中で1人でニヤけていた。

（この幸せがずっと続くといいな…）

そう願いながら家に帰った。

第１１話～花火大会～（前書き）

ここまで呼んで下さった皆様どうもありがとうございます。この１１話あたりからだんだんエッチな場面が出てくる予定です。あまり過激には書かないように頑張りますが、どうぞご了承下さいｍ（＿＿）ｍ　そして、もし宜しければ感想、評価なども是非、書いていただければ嬉しいですｏ（＾－＾）ｏどうぞ宜しくお願い致しますｍ（＿＿）ｍ

第１１話～花火大会～

８月に入り蒸し暑い日が続いている。

（アッチィ～…何にもしたくない…）

私は毎日バイトまでの時間をぐうたらに過ごしていた。

この前の休日デートから何日か経ち、私達はラブラブだけど、相変わらずバイトで会えない為、毎日電話でその寂しさを紛らわしていた。

今まで快晴君の為に自分から何かしたりする事がなかったが、最近の私は寂しいと自分から電話して

「寂しい…会いたい…」

などと口にするようになった。

そんな私の変わり様に快晴君はとても喜んでいた。

「オレも早くかんちゃんに会いたいよ～！来週楽しみだね！」

そう、来週は待ちに待った花火大会だ。

私は彼氏と花火大会に行くのは今回が初めてだ。

何故かいつも彼氏が出来てもイベント前には別れてしまう。
だから今回は念願の花火大会だ。
「もちろんその日は家に泊まるよね？」
「私は大丈夫だけど快晴君の家の方は大丈夫なの？彼女が泊まる事とか何も言わない？」
快晴君は４人兄妹の長男。その下は中学生の弟に、小学生の妹が２人いる。
そんな小さい子がいるのに、彼女を家に泊めるというのはさすがに親が許さないのではないかと思った。
「大丈夫だって！そんな事気にしなくていいからさ！ねっ！絶対泊まってね！」
「じゃあ快晴君のお母さんに聞いてみて？
それでいいって言ってくれたら行くから」
「え～？親なんて関係ないよ～大丈夫だってば！」
思春期の男の子だ。
母親にそんな事を聞くのには抵抗があるのだろう。
しかし、私としても彼氏の親とは仲良くしたい。

やっぱり親の承諾がないと行きづらい。
周りの友達と比べてまだ高校生のクセに考えすぎとたまには思うけど、人一倍ビビりな私は人の目が物凄く気になってしまう。
ましてそれが彼氏の親だと尚更だ。

「ダメ。聞いてからじゃないと私返事出来ない」

「もう。わかったよ。じゃあ後で聞いてみる…」

いやいや返事をする。

電話の向こうで口を尖らせてる姿が目に浮かぶ。

「じゃあ、また後で電話するね」

と言って電話を切った。

しばらくして快晴君から電話が来た。

「あのね、母さんに聞いたら父さんが明日帰って来るから父さんに聞けって言われた」
快晴君のお父さんは長距離の運転手をしていて普段あまり家にいないらしい。

「明日ちょうど父さん帰って来るから、帰って来たら聞いてみるから」

快晴君のお父さんはＯＫしてくれるかな…

次の日の朝快晴君から電話が来た。

「おはようかんちゃん！あのね、父さんからオッケーもらったよ。だから家に泊まってね！」

すごく嬉しそうに言う快晴君。

「お父さん何て言ってたの？」「んっ？なんかね、さっき帰って来たから、彼女泊まらせたいんだけどいい？って聞いたら（いいぞ～）て即答された」

「良かったぁ。じゃあ泊まりに行くね！」

「ヤッター！すんげー嬉しい！いっぱいラブラブしようね！」

「うん！楽しみ！」

これで花火大会の日は快晴君とずっと一緒にいられる。

普段会う時間が少ない分、時間がある時は少しでもたくさん一緒にいたい。私はそんな気持ちになるくらい快晴君の事が好きになっていた。

そして花火大会当日。

「じゃあ、明日の夜帰ってくるから」

そうお母さんに言って家を出た。

もちろんお母さんには快晴君の家に泊まるなんて言えないから

「早苗の家に泊まる」

と言って家を出た。

バスに乗り、快晴君の待つ停留所まで行く。

「おはようかんちゃん！」

「おはよ！今日も暑いね…」「本当、暑いね…でも晴れて良かったよね、夜楽しみだね！」

「すっごい楽しみ！それに快晴君ともずっと一緒にいられるしね！」

そんな話をしながら歩きだす。

今日は最高の花火大会になりそうだ。

とりあえずまだ朝だ。私達はそのまま快晴君の家に行った。

「おじゃましま～す」

「は～い、ど～ぞ～」

今日はお母さんは出て来なかった。

そのまま快晴君の部屋に行き、くつろいでいた。もちろんピッタリくっつきながら。

お昼も食べ終わり、ちょっと眠くなり、2人で布団に横になっていた。

ウトウトしかけた時、

「かんちゃん？」

「うん？どうしたの？」

「オレ今日こそかんちゃんとエッチしたいんだけど…」

「えっ…」

ウトウトしていたのが一気に目が覚めた。

快晴君との初エッチは失敗に終わってしまった。

快晴君がまた求めてくるのは当然の事だし、私も拒む理由もないのだが、前回のあの痛みが忘れられなくて怖くてたまらない。

だけどそんな事を言って快晴君をガッカリさせるのもイヤだった。

私は迫ってくる快晴君を受け入れる。

快晴君の顔が近づいて来た。

私も目を瞑りそっと唇が触れる。

軽いキスをした後だんだん激しいキスに変わる。

舌を絡め、息が出来なくなるほど長いキスをする。

「んっ……んっ……ハッ……快晴君、苦しいよ…」

「ごめん。つい夢中になっちゃって」

思わず笑ってしまう。

気を取り直してもう1度キスをする。

今度は苦しくない。

「アッチィ…」と言いながら服をぬぐ。

相変わらず筋肉質のいい体だ。

自分の服を脱ぐと今度は私の服を脱がす。

「…やっぱりかんちゃんの肌ってすごいキレイ…」

そう言うと耳にキスをして、首にキスをする。

「あっ…」

耳や首が弱い私はつい声が出てしまう。

しかし快晴君はその声でますます興奮する。

「かんちゃんはこことここが弱いんだね…」

そう言うと耳や首筋を舐めた。

「あっ…快晴君…やめて…声出ちゃうから。家の人に聞こえちゃうから…」

声をこらえるのにも限界がある。これ以上されたら声をこらえる自信がない。

「でも、かんちゃんって体全部感じちゃうんでしょ？ここだって弱いでしょ」

そう言うと両手で胸を揉む。そして片方の胸に顔を近づけツンと立った乳首をゆっくりと舐め始めた。

「やっ…快晴君…。声出ちゃうよぉ…」

私は必死で自分の手で口をふさいだ。

「その我慢してる顔がたまんないよ…かんちゃん…」

そういうと快晴君はますます舌使いは激しくなり、いやらしい音をたてる。

そして、すっと快晴君の右手が下に下がって来た。

「ここイジったらかんちゃんどうなっちゃうかなぁ…」そんな意地悪を言いながらパンツの上から私の大事な所を撫でた。

「あっ…」

思わず声が漏れる。

「かんちゃん…声出しちゃ下の部屋に聞こえちゃうよ？」

「だって…」

この時の私の顔はきっとすごく切ない顔をしていたと思う。

気持ちいいのに声が出せず我慢している顔。

その表情を見て興奮した快晴君はさらに激しくせめてくる。

パンツに手を入れ、私の大事な部分を触る。「かんちゃん気持ちいい？この前の時よりすごい濡れてるよ」

「うん…すごい気持ちいい…」

「早く入れたい！」とせっかちぎみだった前回のエッチとは違い、今回は、ゆっくり私を感じさせてくれてるような感じがした。

快晴君の息づかいもだんだん荒くなる。

「でも、もっと濡れてもらわなきゃ」

そう言って私のパンツを脱がせると快晴君の顔が私の大事な所まで下がった。
そして音をたてながら舐め始めた。

「待って、快晴君…ダメ…そんなの…声ガマン出来ないし…」

一生懸命逃げようとしても私の両足を快晴君がしっかりと両手で押さえていてとても逃げられない。

私は枕を顔に押し当て声が響かないようにした。

「快晴君…イヤ…そんなにしたらイッちゃう…」

「快晴君…もう…ダメッ……イクッ」

私はアッというまにイッてしまった。

「ハァハァ…」グッタリしている私を正面に向け、ニッコリ笑って
「ぐったりするのはまだ早いよ。ここからが本番なんだからね」
快晴君のモノはもうビンビンになっている。
「今日こそ入りますように」
そう言いながらゆっくりと快晴君のモノが私の中に入って来た。
「あれっ？」
「どうしたの？」
「全然痛くない」
この前のあの激痛は何だったのかと言うくらいすんなり快晴君のモノが入って行った。
「本当？じゃあ一気に入れてみるよ」
そう言うと思いきり奥まで入って来た。

「ヤッタァ……全部入った…」

快晴君が嬉しそうに言った。

「かんちゃん痛くない？大丈夫？」

「ん…全然痛くない…すごい気持ちいいよ…」

快晴君の太くて大きいモノは私の中にスッポリはまって腰をつく度に奥に響く。

「あぁ…かんちゃんの中すっごい気持ちいい…」

そう言いながらゆっくり腰を動かす。
私は相変わらず声をガマンするのに必死だ。
気持ち良すぎておかしくなりそうなのだが、声を出せないのが切ない。

そうこうしているうちに快晴君の腰の動きがだんだん激しくなってきた。

「かんちゃん…オレもうイクッ…」

「うん…いいよ…」

「…アッ」

素早く抜くと私のお腹の上に白い液体をたっぷりと出した。

「あぁ、いっぱい出ちゃった。今拭いてあげるから待ってて」

快晴君は自分のモノを拭いた後、

「気持ち良すぎていっぱい出ちゃったよ…」

と、恥ずかしそうに笑いながら、私のお腹の上に出した白い液体を拭いた。

まだ真っ昼間だと言うのにずいぶんと激しいエッチをしてしまった…。

「かんちゃん、やっとエッチ出来たね」

「本当だね、気持ちよかったよ～」

「本当？良かったぁ～、なんかさ、かんちゃん年上だしきっとオレより経験あると思うからさ～、満足してもらえなかったらどうしようって実はずっと悩んでたんだよね～。オレ大丈夫かなって…」

快晴君なりに悩んでいたらしい。

私はクスッと笑って快晴君にギュッと抱きついた。

「あのね、エッチする時に1番大事なのはお互いの気持ちなんだよ。2人の気持ちが同じなら下手だろうが何だろうが関係ないんだよ。それが1番気持ちいいエッチだと私は思ってるの。だからそんな悩まなくていいんだよ。それに安心して。快晴君はすごく上手だよ！私イッちゃったし…」

私がそう言って快晴君の顔を見たら

「もうっ！かんちゃん大好きっ！今のはカッコよかった！」

「ねっ、私今カッコよかったよね？自分でもそう思った！」

2人で笑った。

「あのさ、オレね、かんちゃんにお願いがあるんだけど…」

「何？」

「そろそろオレの事呼び捨てで呼んで欲しいなぁ」

「……快晴」

「わぁ…。もう1回言って？」

「快晴！」

「あぁ、オレもう幸せすぎて死んでもいい…」

「いや、死んじゃダメだよ（笑）」

なんだか幸せだなぁっと思った。

呼び捨てで呼んだだけでこの喜びようだ。

快晴と付き合い始めて1ヶ月ちょっと。

まだまだ快晴の事は知らない所もたくさんあるけど、これからもずっと付き合って行けるような気がした。

「ねぇ、もうそろそろ行こうか？」
そう、今日は花火大会。
イチャイチャしすぎて忘れる所だった。
「行こう！」

時間はまだ１７時。
花火が上がるのは２０時。
少し早いが、出店を見ながらブラブラしてると時間なんてあっという間に過ぎる。
歩いていると、すれ違うたび、見た目タチが悪そうな人達をジーッと見ている快晴に気付いた。
忘れていたが、快晴はヤンキーだった。
人混みの中や、普段人がいる時にあまり一緒に歩く事なんてないから知らなかったが。

「ねぇ、何でそんなに人の事ジッと見るの？」
「えっ、だってナメられんの嫌だもん」
「でも知らない人なんでしょ？気にしなきゃいいじゃん」

一緒にいる私は何となく気まずいし…ケンカに巻き込まれたくないし。

「かんちゃんの前では気を付けるようにする！ごめんね？」

「うん、そうして？怖いからさ。後さ、私の事も呼び捨てで呼んで欲しいんだけど…」

「えっ？いいの？本当？……じゃあ沙耶って呼ぶ！」

「うん！めちゃドキドキする！」

そんなラブラブな会話をしていると

「快晴！」

人混みの中でこっちを向いて手を振ってる人がいた。

「おう！優太じゃん」

その人は快晴の友達らしい。

はっきり言ってめちゃくちゃ怖い。

本当に私より年下なの？と言いたくなるくらい大人っぽいというかフケてると言うか…

見た目どうみてもヤクザだ。

「おっ、もしかしてウワサのかんちゃん？」

私の前に来て聞いて来た。

「…そう…ですけど…」

何故か敬語になってしまった。

「優太！お前の顔怖いからかんちゃんビビってんだろ！」

快晴が私の前に立って優太という人のお腹に冗談でパンチをする。

「かんちゃんごめんね？オレの顔怖いよね？よく言われるんだ。でも中身はいいヤツだから☆オレ快晴の友達の優太って言うんだ。ヨロシクね☆」

と笑顔で右手を出してきた。

さっきとは違い、笑顔を見せてくれたからなのか、全然怖くなかった。

「あっ、こちらこそ…」

と、手を出そうとするとまた、快晴が私の前に立った。

「はいはい、ヨロシクね。もういいからお前行けよ」

何故か快晴が優太君と握手をして

「わかったよ！じゃあな、快晴。じゃあね、かんちゃん！」

と手を振ってどこかに行ってしまった。

「ごめんね、かんちゃ…じゃなくて、沙耶。怖かったでしょ、アイツ」

「最初見たときめちゃくちゃ怖かった…でも笑顔を見たらまだ幼い顔だったから少しホッとしたよ！私より年下には見えないけど…」

「アイツが優太って言って、中学からの友達なんだ。あんな顔してるけど、すごいいいヤツなんだ。普段オレ遊びに行く時はたいていアイツの家にいるから」

「そうなんだ、なんかちょっと嬉しいな☆快晴の事また少し知った感じ☆」

「今度他の友達も紹介するよ！あっ、でも握手とかはダメね！」

「えっ？何で？」

「だって、たとえ友達でもかんちゃんが他の男に触れられるの嫌だもん！」

「だからさっきもさせなかったんだ…快晴もけっこうヤキモチ妬きなんだね～」

少しからかってみたら快晴が

「まだ沙耶はオレの事あんまり知らないと思うけど、オレかなりのヤキモチ妬きだから…」

「大丈夫だよ！快晴がヤキモチ妬くような事を私がしなきゃいいだけの事だからね☆」

しかし私は快晴のヤキモチ妬きがハンパじゃない事に今はまだ知りもしなかった。

いよいよ２０時。

待ちに待った花火大会が始まった。

彼氏と見る花火は格別だと思った。

空一面広がる真っ赤な色に、それと一緒にドーンと言う体に響く音にとても感動した。

周りは花火が上がる度に

（おぉ～！）

と言う声がする中、私達はただ

「キレイだね…」

と言うだけで、ただずっと手を繋いで見ていた。

楽しい時間はアッという間に過ぎた。

「もう終わっちゃった…。でもすごいキレイだったね！」

私が少し興奮ぎみに言うと

「マジでキレイだった～！また来年も来ようね！」

「うん！絶対来年も来よう！来年は必ず浴衣着るから！」

「うわぁ…沙耶の浴衣姿早く見てぇ～！」

「来年までのお楽しみ☆」

楽しい時間はアッという間に過ぎたけど、今日はいつもと少し違う。

何と言っても今日は快晴の家にお泊まりだ。

まだまだ一緒にいられる。

私は快晴とこんなにも長い時間一緒にいられる事が嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。

夜はまだまだ長い。

第１２話～お泊まり～

「さてと…。帰ろうか、沙耶」

時間は２１時すぎ。

こんな時間に快晴と一緒にいるなんて信じられない。

「うん！」

もう、嬉しくて終始笑顔の私と同じくらい笑っている快晴。

「バスもうないし母さん迎えに来るから」

しばらく待っていると快晴のお母さんが迎えに来てくれた。

なんか図々しいような感じがして申し訳なさそうに車に乗る。

「すみません…」

と一言言うと、快晴のお母さんは

「いいんだよ～。でもかんちゃんが今日家に泊まる事、かんちゃんのお母さんとか知ってるの？」

（ドキッ）とした。

「はい。言って来たから大丈夫です」

「ならいいんだけど、男の子の家に泊まりに行くのとか何も言われないの？」

「んー…特に言われないです」

「ならいいんだけどね☆」

快晴のお母さんにまでウソをついてしまった。家のお母さんには早苗の家に泊まると言って出てきたから。

でも、快晴のお母さんに

「家のお母さんにはウソついて来ました」

なんて言える訳もなく…

快晴のお母さん的にも、あまり私が泊まる事は賛成ではないんだろうと思った。

何となく気まずい感じもしたが、今さら家に帰れないし。

そうこう考えている間に快晴の家に着いた。

快晴の部屋に戻って来た。部屋に入ってしまえばもうそんな事考える余裕もなくなるほどの快晴のラブラブ攻撃を受ける。

（まぁ、いっかぁ）

とりあえず今日は何も考えずに快晴と一緒に楽しみたい。またいつこんなに一緒にいれるかわかんないし。

「沙耶〜！スキだよぉ〜。ずっと仲良しでいようね〜」

「うん！絶対だよ。ずっと仲良しでいようね。私も快晴の事大スキ〜」

会話と言ったらそんなアマ〜イ話ばかりだった。「じゃあ、オレち

ょっとフロ入って来るから待っててね☆」

「うん☆早く戻って来てね～」

快晴がお風呂に行ってる間に1人でボ～っとテレビを見ている。

とりあえずちょっと部屋を物色してみようと思って色んな所を見てみたが、特に変なモノはなかった。

元カノとかの写真とかあるかなぁと思ったけど、見つかったのはエロ本とエロビデオだけだった。

見える所においてあるという事は隠してるわけでもないと思うからネタにもならないし…

CDなんか聞きながらご機嫌に鼻歌まで歌っている私。

そしたら快晴がお風呂から戻ってきた。

しかしなんか浮かない様子。

「なんかぁ、オレ下で寝ろって言われたぁ」

「お母さんに？」

「うん…。嫌だぁ～、オレ沙耶と一緒に寝たい～。でも、なんか、下で寝なかったらもう泊まらせないって…」

私の予想以上に快晴のお母さんは厳しかった。

でも考えてみたら親としては当然な事なんだと思う。

快晴はまだ高校1年生だ。

もし、間違って妊娠なんてしたら…と思うのは当たり前だ。

家の親だってそうだし、どこの親だってそう思うに決まってる。

快晴が女の子を泊めるのは私が初めてらしい。

だから余計心配なんだろう…

「お母さんは心配してるんだよ。もしなんかあったらって……だから仕方ないよ。淋しいけど別々に寝よ？」

「ヤだぁ…オレ沙耶と一緒に寝たい～ヤダヤダヤダァ」

甘えん坊の快晴が現れた。

「ダーメ。今日は別々に寝るの。今ここで一緒に寝ちゃったらもう私快晴家に泊まれなくなっちゃうんだよ？それでもいいの？」

「…ヤダ」

「でしょ？だから今日はガマンしよう！絶対そのうち一緒に寝れるようになるから。ねっ☆」「うん…ガマンする…」

「快晴エライぞぉ☆じゃあもう寝よう！」

「わかった…じゃあお休みのチュウだけする…」

「そうだね☆じゃあ、お休み快晴☆」

「お休み沙耶☆」

あまり激しいキスだと、快晴が欲情すると思って軽いキスだけにし

た。

快晴は肩を落とし部屋を出て行った。なんだか赤ん坊を宥めたような気分だった。

でもこれで快晴のお母さんは安心すると思うし、次からはたぶんもう少しお母さんも甘くなると思うし…

昼間エッチしといて良かったと思った。

私は快晴の布団で1人で今日の出来事を振り替える。

「やっとエッチ出来たなぁ…」

1人で思い出しニヤける。

すると静かに階段を上ってくる足音が聞こえた。

（…まさか）

そう思ったらドアがあいた。

「やっぱり…」

もちろん入ってきたのは快晴だ。

なんだか笑ってしまった。「もう…ダメでしょ？」

「だってぇ…せっかく沙耶がいるのに…耐えられないんだもん…」

「快晴っ！」

下からお母さんが呼んでいる。

「ほらバレた。今日はもう寝よ☆朝起きたらすぐ来てよ☆」

「クッソーあのババアまじムカつく…。ハァ…じゃあ朝起きたら速攻来るからね！お休み☆」

もう1回キスをしてブツブツとお母さんに文句を言いながら下に降りて行った。

私はすごく疲れたからその後すぐ寝た。

快晴はいないけど快晴の匂いがする布団がすごく心地好かった。

……ゴソゴソ……

どれくらい経ったのだろう。

外は少し明るくなっていた。

物音で目が覚めた。

「沙耶…」

「快晴？」

寝ぼけながら快晴の方を見る。

「母さん新聞配達いったんだ、だからオレもここで寝る」

快晴のお母さんは毎朝新聞配達のアルバイトをしているらしい。「あぁ、そうなんだ…」

寝ぼけてて何を話したか覚えてはいないが、そのまま快晴と一緒に寝て、目が覚めたら快晴の腕の中で寝ていた。

すっかり目が覚めた私は快晴の腕の中から出たくなくてそのままジーッと快晴の顔を見つめていた。

口を半開きにした無防備なその寝顔が私にはとても愛しく、そっと手で頬を触った。

「ん～…かんちゃん…？」

「あっ、ごめん…起こしちゃったね…」

「んーん。もう起きる。かんちゃんずっと起きてたの？」

「さっき目が覚めた所。快晴の寝顔があまりにも可愛かったからずっと見てたの☆それと、かんちゃんじゃなくて沙耶でしょ？」

「あっ、そうだった…。オレは朝この部屋に来た時に沙耶の寝顔みたから～。寝ぼけた沙耶も見れたし～。可愛かったぁ」

「イヤ～！私、寝ぼけてないもん！」

自分が快晴の寝顔を見るのはいいけど、自分が見られるのは恥ずかしい！

「今日も夜までずっと一緒にいられるね！」

快晴が嬉しそうに言う。

今日もバイトは休みだし、１９時のバスで帰る予定。

まだまだ時間はたくさんある。

とりあえず、やっと起き出したのがお昼過ぎだった。

「どこ行こうか？沙耶どっか行きたい所ある？」

「ん～…行く所ってあんまり無いよね…」

ここは都会とは違って遊ぶ所なんて全然ない所だ。

「その辺ブラブラしようか☆」

遊ぶ所は無いけど快晴とならどこに行ったって嬉しい。

快晴の自転車の後ろに乗り下り坂を下りていく。

相変わらず気持ちいい風だ。

とりあえず来たのはゲームセンター。

2回目のプリクラだ。

今日もピッタリくっついたりホッペにチュウしたりと、ラブラブなプリクラを撮った。

ゲームセンターを出てその辺をプラプラする。

服屋さんや、雑貨屋さんなど見て歩き、プラプラしてるだけでも時間はあっという間に過ぎる。

「あ〜あ、もうこんな時間だぁ、沙耶帰っちゃうのかぁ…淋しいなぁ…家に住んで欲しいなぁ…」

「住みたいなぁ、快晴家。そしたらずっと一緒にいれるのにねぇ」

私達はバス停に来た。

一緒にいた時間が長い分だけ別れが惜しい感じがする。

「でも、もうちょっとで夏休み終わりだし、そしたらまた毎日学校で会えるよ！」

「そうだけどぉ、沙耶ともっと一緒に夏休みを満喫したかったなぁ…」

「ごめんね…もっと会えたらいいんだけどさ…」

私がバイトしてなかったらもっと快晴と会う時間作れるけど、実際バイトをしてなかったらお金も無いし会いにすら来れない…

「しょうがないよ！バイトは大事だし！オレ我慢する！」

そんな話をしているとバスが来た。

「あーあ…バス来ちゃった…」

「ごめんね？すっごい楽しかったよ☆次は学校で会おうね！着いたら電話するから」

そう言って私はバスに乗った。

お互い小さく手を降ってバスが発車した。

あっという間の2日間、すごく楽しかった。

すると、携帯が振動した。

快晴からメールが来た。

（オレもすごい楽しかったよ☆沙耶の事もっともっと好きになっちゃった！もう沙耶に会いたいよ…。沙耶とエッチしてぇー！！）

思わず携帯を見て1人でニヤけている私。

周りから見たら辺なヤツだと思われるので、下を向いて顔を隠す。

（私も快晴大好き☆ずっと一緒にいれたらいいのにね…早くラブラブしたいね☆）

快晴にメールを返す。

さっきまで一緒にいたのにもう会いたい。

付き合ってすぐの頃は本当にそう思っていた。

まだ相手のイヤな所も見えてない、たぶん付き合ってる中で1番楽しい時期。

バスを降りてお父さんに迎えに来てもらう。

「どうだ、花火大会は楽しかったか？」

まさか男の家に泊まりに行ってたなんて知らないお父さんが聞いてくる。

「めっちゃ楽しかったよ！」

「そうか、よかったなぁ」

やっぱりウソをついている罪悪感を感じる。

家に帰り、お母さんに会う。

エッチをして家に帰って来る日はいつも何となく気まずい。

絶対バレてないとわかっていても、ウソをついてる後ろめたさで、なんとなく全身を上から下まで見られているような感じがする。

「楽しかったかい？」

お母さんが真顔で聞いてくる。

「楽しかったよ。花火もキレイだったし」

「そう、よかったね」

内心ドキドキしながら答える。

お風呂に入り、部屋に戻る。

2日しか経っていないのに久しぶりに感じる自分の部屋。

布団に倒れこみ、早速快晴に電話をする。

「もしもし沙耶！」

呼び出し音が鳴ったか鳴らないうちに快晴が電話に出た。

「早っ！何してたの？」

「今ね、優太の家にいたよ。外に出て話してるよ！これから他にも何人か来て飲み会するみたい」

「優太って昨日会った人だよね？」

「そうそう！あの老けた顔のやつ」

「ハハ☆そっかぁ、悪い事しちゃダメだよ！」

「大丈夫！沙耶がイヤがる事はしないから！沙耶…早くエッチしたい…」

「さては私の体が目当てなのね？」

冗談で言うと逆に快晴は焦って

「違う！違うよ、沙耶。そうじゃないよ！」

焦ってる姿が目に見えるようにわかる。

「冗談だよ☆わかってるよ、快晴はそんなイヤなヤツじゃないもんね？」

「そうだよ！オレは沙耶の全部が好きなんだもん～」

ホッとしたように快晴が言う。

「わかってるよ☆もう友達の所戻りな☆」

「うん☆でもまだ大丈夫！まだ沙耶と話したいもん」

そう言ってしばらく話をした。

さっきまで会ってたのに電話でまだまだ話す事はたくさんあった。

1時間くらい話しただろうか。

「あっ、友達来た」

「じゃあこれから飲み会だね！飲み過ぎないようにね！」

「うん☆わかった☆じゃあまた明日電話するね！お休み！大好き☆」

「私も大好き☆お休み」

そう言って電話を切った。

昨日と今日で好きと言う言葉を何回言っただろう…

今まで付き合った人達でこんな相手からも自分からも好きという言葉を口にするのは快晴が初めてだ。

最高の2日間だったなぁと1人で思い返し、眠りについた。

第13話～バレたっ！～

短い夏休みはあっという間に過ぎた。

もうすぐ学校が始まる。

3年生の私はそろそろ卒業後の事を考えなければならない。

特にやりたい事もないし、このままアルバイト先の本屋さんに就職しようかなと考えていた。

バイト先の店長に

「店長、私このままここに就職したいんですけど…」

と、何気なく聞いてみると

「おぉ！いいよ」

と即答された。

夏休み中に就職が決まってしまった。

これで何も考えず残りの高校生活楽しめる。

何より快晴と思い切り遊べる。

私の頭の中はもう、快晴でいっぱいだ。

家にいる時もご飯を食べる時も、バイトしてる時も寝る時も…

最初に付き合った時快晴に

「オレ今かんちゃん病なんだよね」

と言われた事があった。

どこにいる時もどんな場面でも私の事ばかり思い出すと。

まさに今の私はその時の快晴と全く同じだ。

今私は（快晴病）だ…

（早く快晴に会いた〜い）

そう心の中で叫びながら2人で撮ったプリクラを眺める。

残り少ない夏休み、私は快晴と遊ぶ時の為にと一生懸命働いた。

そしてやっと学校が始まった。

久しぶりに見る友達。

みんな夏休み中はずっと彼氏と一緒にいたみたい。

うらやましいなぁと思いながらも話をしていると、ビックリした事が2つあった。

1つは佳乃に彼氏が出来ていた。

夏休み中に出来たみたいで、みんなを驚かせようと黙っていたらしい。

そしてもう1つは久美が妊娠した。

これにはみんな本気でビックリした。

「ヤバイじゃん…どうすんの？」

みんなの心配をよそに久美は以外に何も考えてないようだ。

「知らね、何とかなるんじゃね？」

久美はこういうヤツだ。

みんなはいつも、久美の行動に驚かされる。

でも、久美の彼氏は快晴と同じ年。

もともと学校に行っていないから、働いてはいる。

しかし、産んで欲しいと言われたらしいが、まだ籍は入れれない。

しかも久美のお母さんは家のお母さんと同じですごく厳しい。

たぶん妊娠したなんて知ったら家を追い出されるんじゃ…

だから久美はきっともう堕ろせないと言われるまで黙ってるつもりだ。

（久美…どうすんだろ）

そう思いながら

（私も気をつけなきゃ）

快晴とエッチする時はコンドームはつけないし、外に出すだけ。

妊娠したら困るとは思っていても気持ちイイ方が優先になってしまう。

みんな、自分は大丈夫だと思っているから。

（出来たらヤバイ）

と思ってはいるけど、結局、エッチをする事、妊娠するという事を軽く考えている。

放課後になり久しぶりに快晴に会う。

私のクラスのＨＲが終わると快晴のクラスまで迎えに行く。

快晴の友達も、私と付き合ってるを知ってるから、別に私が快晴の教室の前で待っていても不思議な顔をする人はいない。

やっと快晴のクラスもＨＲが終わり、教室のドアが開く。

教室から出てきた快晴に私は抱きついた。

「久しぶり～☆」

私以外の前ではクールな快晴は1度私をギュッと抱き締めてすぐ離れた。

それがまた楽しい。

今日は快晴のクラスで遊ぶ事になった。

久美が妊娠した事を言うと

「オレ達も作る？」

快晴にとって久美の妊娠はただの他人事みたいだ。

「でも、良ってオレと同じ年じゃん。まだ結婚出来ないよね」

良とは久美の彼氏の名前。

快晴は久美の彼氏と知り合いだったらしい。
私達の住んでいる町は小さな田舎町だ、その辺のヤンキーはみんな知り合いのようだ。

「とりあえずさ、エッチしよ？」

「はぁ？」

突然何を言い出すかと思えば…

そして、私を廊下側からも外側からも四角になる場所に連れて行き、

「だって…沙耶見てると押さえられないんだもん。あれからずっと会えなくてガマンしてたし…」

そう言うと強引にキスをしてくる。

こうなるともう抵抗出来ない。

私は誰かに見つかるんじゃないかとハラハラしながら快晴の好きにされる。

ワイシャツの下から手を入れ、胸を揉み、ブラジャーをまくり上げ

て乳首をつまむ。

「…ん…」

思わず声を出すと、その声で快晴はどんどんエスカレートして行き、パンツの中に手を入れる。

「沙耶…もう濡れてるよ？」

ハッキリ言って、ここが学校で、誰かに見られるんじゃないかと思うとハラハラするが、逆にそれが刺激的で妙に感じてしまう。

実際、快晴と早くエッチがしたかったというのも事実だ。

だいぶ興奮してガマン出来なくなった快晴が

「沙耶…もう入れていい？」

と聞いてくる。

「うん。いいよ…」

そう言うと早速後ろ向きにされ、バックで入れる。

静かな教室に肌と肌がぶつかり合う音だけが聞こえる。

それもまた、いやらしい感じがして、少し興奮する。

しかし、興奮しているのは私だけじゃない。

私以上に興奮している快晴はあっという間にイってしまった。

結局、また避妊もしないでしてしまった。

久美の妊娠で自分も気を付けなきゃと思ったのはあの時だけだった。

（やっぱり他人事だと思ってるんだなぁ、私。）

快晴は快晴でその行為が終わると、満足そうに

「あ～☆幸せ～☆」

私に甘えながらが笑顔で言う。

あの、みんなが見てる前でのクールな快晴を思い出して思わずおかしくなる。

「快晴は本当に甘えん坊だね～、快晴の友達に教えてあげようかな。実は快晴はすごい甘えん坊なんだよ～って☆」

「沙耶～！もしそんな事したら…こうしてやる！」

そう言うと、いきなり私の脇をコチョコチョしてきた。

「キャーッ！」

思わず叫ぶ私。

「ごめんなさいごめんなさい！絶対言わないから～！もうやめてぇ～！」

くすぐったくって涙目になりながら必死で叫ぶ。

「わかればいいよ！」

ニヤッとして手を離す。

私はハァハァいいながらぐったりしていた。

その時いきなり

（ガラッ）

教室のドアが開いた。

「お前達！まだいたのか。用事がないんならさっさと帰りなさい！」

見廻っていた教頭先生に怒られた。

快晴はそんな教頭先生を無視。

私はすぐ

「はぁい」

と返事をすると教頭先生はまた見廻りの続きを始めた。

「そろそろ学校出ようか、１回見廻り来たら帰るまで何回も来るよ？」

「そうだね、タバコも吸いたいし。公園行こっ！」

そう言って学校を出た。

手を繋いで話しながら歩いていると一台の車が通った。

「あっ…」

私の心臓が思い切り（ドキン）と言った。

「沙耶？どうしたの？」

不思議そうな顔で私を見ている。

「…今通った車の助手席に乗ってたのお母さんだ…」

そう、絶対にさっきのは家のお母さんだ。

ずっとこっちを見ていた。

手を繋いでいたし、完全に快晴と付き合ってるのがバレた…

「本当に？オレ全然見てなかったからわかんないけど…マズイ？」

「わかんない…。でもとりあえず休みの日とかあまり出歩けなくなるかも」

「えぇ！マジで？そんなに厳しいの？」

「うん…まだわかんないけどね…。とりあえずは無視されそう…」

私は動揺しながら心の中で、（どうしよう…）とずっと考えていた。

別に悪い事してる訳じゃないのに。

でも今までの経験上、彼氏が出来たのがバレていい思いはした事がない。

それからバイトまでの時間、ずっと考えていた。

快晴の話もあまり聞かないですごく悪い事をした。

でも、家に帰ったら何て言おうかという事しか考えられなかった。

快晴もわかってくれてたけど…

こんな厳しい母親がいて、快晴にも嫌な思いをさせるんじゃないかと思い、嫌われたらどうしようと悩む。

バイト中もその事ばかり考えた。

バイトが終わり、家に帰ると、お母さんが黙って私の方を見ていた。

「あんた、今日男と手繋いで歩いてたでしょ」

何も悪い事をしてる訳じゃないのにどうしてこんな怒られた口調で言われなきゃいけないんだろう…

「うん、彼氏が出来たの」

「子供のクセに何が彼氏なんだか…名前は？同じ年なの？」

事情聴取されている気分だ。

「快晴って言うの。今…1年生」

「そんなガキと一緒にいて何が楽しいの？」

「2才しか違わないもん、年下だと思ってないし」

「…フン」

と言ったきりお母さんは喋らなくなった。

もうその場にいたくなくて、すぐお風呂に入り、自分の部屋に戻った。

ベットに横になり大きくため息をつく。
どうしてお母さんはいつもああなんだろう…
彼氏が出来なきゃ出来ないで
「あんた彼氏もいなくて寂しいね～」
とか言うクセに実際に出来るとこうだ。
どう思ってるのか本当にわからない。
でも、快晴の事本当に好きだし、お母さんには快晴との事認めてもらえるように私が頑張らないと。
「別に反対される理由もないし、堂々としてればいいのよ」
私はそう言って自分に言い聞かせた。
何を言われても気にしない事にした。
快晴から電話が来て

「沙耶…お母さん大丈夫だった？」

「うん。なんか名前とか年とか聞かれたけどそれだけだよ。快晴ごめんね？快晴は気にしなくていいからね☆」

快晴に心配をかけるのも嫌だし、嫌な思いもさせたくない。

「大丈夫ならいいんだけど…」

私は話題を変えてそれからまた、いろいろ話をして電話を切った。

それから何日か経ち、あれからお母さんは無視する訳でも、快晴の事を何か言って来る事もなかった。

ある日、私は勇気を出してお母さんに

「あのさ、今度彼氏を家に連れてきたいんだけど……」

本当にものすごく緊張した。

はっきり言って、バイトの日はあまり一緒にいられる時間がないから学校や公園にいるけど、バイトが休みの日は本当に行く所がない。

学校が終わってからだと快晴の家まで行く時間もないし、だからと言って、遊ぶ所がないのだ。

それなら私の家に快晴が来れるようになると、毎週私のバイトが休みの日はゆっくり出来るのだ。

「なんで？」

お母さんに聞かれる。

「なんでって言われても…。何となく。バイト休みの日とか行く所ないし…」

「……勝手にすれば？」

「えっ？いいの？」

「……」

「じゃあ次の土曜日連れて来るからね？」

「勝手にしなさいって。お母さん食べる物とか何も用意しないからね」

「いや、いいよそれは」

そんな事より、家に連れて来るのを許してもらえるなんてはっきり言って奇跡だと思った。

ダメ元で言ってみたのがラッキーだった。

しかし、どうしたのだろう…なんか逆に怖い。

次の日、快晴に報告する。

「次の土曜日家に来ない？」

「えっ？いいの？すげ～行きたい！」

「何かさ、快晴を家に連れて来たいって言ったらお母さんが勝手にしなさいって…。だから土曜日は家で遊ぼう！」

「やった！楽しみだ～」

当時は土曜日がまだ学校だった為、学校が終わってから快晴が家に来る事になった。

第１４話～母とご対面～

そして土曜日になった。

「沙耶～！帰ろ☆」

最近は快晴が３階にある私の教室まで迎えに来てくれる。

「うん！じゃあね、みんな☆」

「おう！かんちゃんバイバ～イ」

みんなにバイバイして教室を出る。

「あ～、俺緊張するよ…沙耶のお母さんいるんでしょ？」

「いるよ。私もなんか緊張する…」

「…ねぇ、今まで付き合った人沙耶の家に入った事あるの？」

「えっ？…お母さんがいる時はないよ…」

「…内緒で入れた事あるんだ…」

「う、うん…そんな何回もじゃないけどね」

「ふ～ん…」

なんだかちょっと不機嫌そうな顔をしながら聞いてくる。

なんかドキドキしながら答えた。

そう言えば快晴って今まで私の過去の事とか、前の彼氏の事って聞いた事なかったな。

なんか珍しいなと思いながら、歩いていると

「言ってたかどうかわかんないけど俺さ、すごいヤキモチ妬きだから…」

ちょっと口を尖らせながら快晴が言った。

「なぁ～んだ、ヤキモチ妬いてたんだぁ～。私なんか怒らせるような事したかなぁ～って思っちゃったよ！過去の事だからさ！気にし

ないでよ☆今は快晴だけだしさ！お母さんがいる時に家に入るのは快晴が初めてなんだからさ☆☆ねっ？」

「まっ、いいんだけどさ！」

「とりあえず、お母さんに会ったら一応挨拶して、礼儀正しくお願いしますよ？」

ピッタリくっつきながら笑顔で言うと、やっと快晴も機嫌を直した。

「俺また緊張してきた…」

「大丈夫だって！普通にしてれば！」

そうこう言ってるうちに家についた。

「玄関あけるよ？」

「う、うん」

「ただいまー！」

玄関をあけるが、お母さんがいる気配がない。

「あれ？いないみたい…。とりあえず上がって？」

「おっ、おじゃまします！」

快晴が上がった瞬間玄関が開いてお母さんが入ってきた。

「あっ、お母さん、ただいま。どっか行ってたの？」

「おかえり。畑行ってたの」

そう行ってこっちに歩いてくるお母さんの前に快晴が立った。

「あっ、あの…初めまして…桜井快晴と言います…おじゃましてます…」

緊張しすぎて声が小さくて、もじもじした快晴を見て内心ヒヤヒヤしながらお母さんの様子をうかがう。

「あ～、沙耶がいつもお世話になってますね。ゆっくりしてきなさい」

そう言って一瞬ニコッとして台所に行った。

「あっ、はい」

快晴が大きく息を吐く。

「ハァ、緊張した…沙耶のお母さん、なんか迫力があって…」

「デカイからでしょ？まぁ、とりあえずはオッケーでしょ☆部屋に行こう☆」

そう言って私は快晴を自分の部屋に案内した。

「へ～！ここが沙耶の部屋かぁ☆いいね！沙耶っぽい！」

「私っぽいって何？どんな感じ？」

私がプッと吹き出して聞いた。

「いや、なんかさっぱりしてるっていうか、女女してないっていうか…」

「快晴から見た私って女っぽくないって事？」

「いや、そうじゃなくて！…ん～何て説明していいかわかんない！」

「なんだそれ（笑）さっぱりしてるのは、ただあんまり物置くと狭くなっちゃうからだし、本当は可愛い物とかいっぱい置きたいんだよ～。快晴はまだまだ私の事わかってないね～！しかも私どっちかって言うとさっぱり系じゃなくてこってり系ですよ？」

ちょっと意地悪っぽく言うと快晴が

「まだまだ沙耶の事わかってないな～俺。」

そう言って落ち込む快晴を見てるとすごく可愛く思えてギュッと抱きつきながら

「ごめんね？ちょっとイジワル言いたくなっただけだから☆まだうちら付き合って2ヶ月しかたってないんだよ？私だって快晴の事ま

だまだ知らない事たくさんあるし、これからお互い知っていけばいいんだよ☆だから落ち込まないでよ☆」

「そうだよね！うん！まだまだこれからだもんね、俺たち！なんかいつも励ましてくれてありがとね！沙耶☆でも俺すぐ本気にするからあんまりイジワル言わないでね！」

そう言ってチュッとキスをしてきた。

その瞬間

「沙耶〜！」

台所からお母さんが私を呼んだ。

一瞬2人でドキッとして、少し離れて座ったが、別に見られてる訳ではないとホッとして台所に行った。

台所に行くとお母さんがお昼ご飯を作ってくれていた。

「ほらっ、これ持って行って食べさせなさい」

おにぎりや、唐揚げなどたくさん作って用意してくれていたお母さ

んに感動して

「…ありがとう」

と泣きそうな声で普段言わない言葉を言った。

あのお母さんがこんな事してくれるなんて…

そう思いながらご飯を部屋に持って行った。

「快晴…お母さんがこんなに作ってくれた…」

「うわ～、すげ～！俺も食べていいの？なんかすげ～嬉しいね！」

「うん。なんか信じられないけど、すごい嬉しい！」

2人でそう言いながらお昼ご飯を食べた。

「美味しかった～！」

と言ってベッドにゴロンと横になる快晴。

「沙耶もこっちおいでよ！」

「う、うん」

そう言ってベッドに行き、快晴が横になって私はベッドに腰掛けながらテレビを見ていた。

そのうち快晴が私の腕を引っ張りベッドに寝かせた。

「沙耶…」

私に抱きつきキスをしてくる快晴に、私は抵抗した。

さすがに自分の部屋でするのにはまだ心の準備というか、もしお母さんにバレたらと思うと恐ろしくて快晴を受け入れられない。

「快晴！今日はダメ！なんか怖いし、バレたらヤバいから…」

私がベッドから起き上がって言うと

「え～？いいじゃん。大丈夫だって、ねっ？」

そう言って快晴は力ずくで私をまたベッドに寝せようとする。

「快晴お願い！今日は止めよう？お母さんに見つかったらマジでヤバいしさ…」

「大丈夫だって！音とか立てないようにするし、絶対バレないようにするから」

快晴はもうエッチがしたくてどうしようもないという感じで、その気になったらもう抑えられなくなる。

私だってしたくないわけじゃない…というか、どっちかと言うとしたい。

だけど、ここでもしバレてしまったらせっかく彼氏を自分の家に連れてこれるようにまでなったのが全て水の泡…それどころか今まで以上に厳しくなるだろうし…。

私はいつもマイナス思考で、もし何かあった時の事ばかり考えてしまうから、こういう時も絶対バレないって思えない。

私は必死で快晴にお願いする。

快晴はふてくされ

「あ～！したかったなぁ…。沙耶と一緒にいるのに出来ないなんて生き地獄だ」

などと、しばらくグチグチと言っている。

高校1年生の健全な男の子だ。彼女がいたら毎日でもしたいと思うのはわかる。

だけど、もう少し私の気持ちもわかってくれてもいいんじゃないの？エッチするためだけに付き合ってんのか？うちらは…

と思い大きくため息をついた。

すると快晴も自分でグチグチ言い過ぎたと気付いたのか、若干機嫌が悪くなっている私を見て焦っている。

「まっ！しょうがないけどね！別にエッチしなくたって沙耶といればいいし！」

と必死で私の機嫌を伺っている。

あまりにも焦っているのがわかるので、そんな快晴を見て私も思わず笑ってしまう。

「そうだ！沙耶、アルバムとか見せてよ！沙耶の小さい頃の写真見たい！」

快晴は早く話題を変えなきゃと、必死に私にアルバムを持って来るように急かす。

そんな快晴を見て面白くて機嫌も治り、言われた通り小さい頃のアルバムを出して快晴に見せた。

「わっ！沙耶だ！今と一緒じゃん！沙耶って童顔だからなんかあんまり変わってない感じがする。てゆうか、可愛すぎる！これ１枚ちょうだい☆」

子供の頃の私の写真を見て快晴はものすごくはしゃいで、しまいにはアルバムから一枚自分の気に入ったヤツなのか私の写真を取って自分のポケットに入れた。

「そんな小さい頃の写真なんて持っててどうすんの？」

「もちろん部屋に飾っとくじゃん☆」

「え～？やだぁ～恥ずかしいよ！」

「いいじゃん、可愛いんだもん」

当たり前のように言う快晴に何も言えない。

快晴の友達だって家に遊びに来るのに、こんな写真飾ってるの見られたら恥ずかしいじゃん。

でも、まぁいっか、快晴が気に入ってくれたなら…

そう思いながら、しばらくアルバムを見ていると携帯が鳴った。

「あっ、弥生だ。」

「ハイハイ、弥生どうしたの？」

「あっ、沙耶、すごいお願いがあるんだけど！」

なんか慌ただしいしゃべり方の弥生。

「どうしたの？」

「実は学校の実習でさ、土曜日だっていうのに、これからレポートみたいなの書かなきゃダメでさ、遅くなるんだ。だから今日沙耶バイト休みなの知ってるんだけど、出てもらえないかなと思って…」

申し訳なさそうに言う弥生に私はすぐ

「いいよ、大丈夫！じゃあ今日は私出るから、次私に何かあった時変わってよね！」

「わかった！ごめんね？じゃあヨロシク！」

そう言って電話を切った。

「快晴、ゴメン！これからバイトになった！」

「え～？今日休みなんでしょ？」

「うん、本当はね、でも一緒にバイトしてる友達が弥生っていうんだけど、学校の実習でどうしても出られないんだって、だから代わりに今日出る事になったんだ」

バイトの人数はそんなに多い訳じゃないから休みでも、誰かが都合

が悪くなったら代わってあげる事はよくあった。

だから快晴には悪いけど、バイトに行くしかない。

「もっといっぱい遊びたかったのになぁ～」

またまた、口を尖らせる快晴に

「本当にゴメンね？なんか今日は快晴にイヤな思いばかりさせちゃったね…」

少し落ち込みぎみな顔をしている私に

「な～んてね、気にしないで☆またいつでも沙耶家にも来れるしさ！学校でも会えるし☆大丈夫だよ☆」

そう言って私をギュッと抱き締めてくれた。

「ありがとね、快晴大好き☆」

「うん、オレも沙耶の事大好き！」

そして、家を出る。

「お、おじゃましたした…」

お母さんの前でまたまた小さい声でもじもじしている快晴。

「またおいで」

お母さんの一言に

「あっ、はい…」

もうちょっと元気に言ってくれればいいのになぁ～、と思いながらも今の快晴にはこれが精一杯なのだろうと思いながら

「じゃ、バイト行ってくるから～」

そう言って家を出た。

快晴が私の自転車をこいでいつものように私が後ろに乗る。

「あ～！緊張したけど楽しかった！また絶対沙耶家遊びに行くからね！」

「うん！バイトが休みの日は家で遊ぼうね☆」

そう言ってバイト先まで送ってもらい、快晴は帰って行った。

楽しかったけど帰ったらお母さんに快晴の事何て言われだろう…と心配しながらバイトをする私だった。

第１５話～男のヤキモチ～

バイトから帰ると早速お母さんに呼ばれる。

「あの快晴って子なんなの？随分愛想がない子だね、顔はかわいい顔してるのに」

やっぱり…そう言われると思った…

「緊張してたんだよ、お母さん怖いって私言ったから」

「ふ～ん…」

お母さんはそれ以上何も言われたかったけどやっぱり第一印象は良くなかったなぁ…と思い少し落ち込んでいた。

そこに快晴から電話が来た。

「沙耶～、お母さん何か言ってた？」

まさか良く思ってないなんて言えるわけがない。

「んーん、特に何も言ってなかったよ？」

「ならいいんだけどさ～、オレすげぇ人見知りだからさ…」

確かに、あたしと付き合ったばっかりの時もモジモジしてたっけ…

「気にしなくて大丈夫だからさ、また家で遊ぼうね☆」

「もちろん！あっ、そうだ、オレこれから健太家遊びに行ってくるから」

健太とは同じクラスの友達だ。

「わかったよ～、浮気するなよ～」

「当たり前じゃん！沙耶以外の女なんて興味ないもん。それより明日はオレ家来れるの？」

明日は日曜日…だけど夕方からバイト…でも快晴に会いたい！

「17時からバイトだけどそれまででもいいなら行く！」

「いいに決まってんじゃん！じゃあ、明日またバス停まで迎えに行くからね！あっ、その前にたぶん夜中になるけど帰って来たら電話するね☆」

別に二人で決めた事ではないけれど、遊びに行く時と帰って来た時に連絡するのが当たり前になっていた。

まぁ、私は快晴と付き合ってからまだ1回も友達と遊んでいないけど…

「わかった！じゃあね、あたしもうちょっとしたら寝るけど、連絡待ってるよ☆」

…その後、帰って来たと電話が来たのは夜中の3時だった。

こんな時間に帰って来て朝起きられるのかなと思いながら電話を切った。

次の日、バスに乗りいつものバス停で降りるが快晴の姿がない。

朝家を出る時メールしたけど返事がないからきっと寝てるんだろう。

「仕方ない、1人で行くか…」

1人で呟いて歩いた。コンビニで飲み物など買うついでに快晴の朝ごはんも一緒に買い、もう1回バスに乗った。

正直言うと1人で快晴の家に行くのは不安。なんとなく快晴が一緒じゃないと緊張する。

家に着くと玄関の前で深呼吸してチャイムを鳴らす。

「ハ〜イ」と言う快晴のお母さんの声が聞こえて私は玄関のドアを開けた。

「あっ…おはようございます」

「あら、かんちゃん。おはよう☆今日は快晴迎えに行かなかったのね」

「ハイ、一応迎えに来てくれるって言ってたんですけど、朝メールしたけど返事がないんでたぶん寝てると思って1人で来ました☆」

「まぁ、そうだったの。どうぞ～入って～☆かんちゃん来たらすぐ起きると思うから」

「ハイ、お邪魔します☆」

そう言って快晴の部屋に入ると案の定グッスリ寝ている。

私はこっそり部屋に入り静かに歩いて快晴の近くまで行く。

しばらく快晴の寝顔を見ていると、すごく愛しくなり快晴の頬にキスをした。

その瞬間快晴の目がパッと開いた。

「わっ！ビックリしたぁ～。おはよう快晴☆」

あまりにもパッチリ目が開いたので私の方がビックリしてしまった。

快晴は寝ぼけてるのか、バッと起き上がりしばらく何かを考えているみたいに動かなかった。

そしてようやく

「沙耶っ！あれっ？何で？今何時？沙耶どうしているの？」

どうやらまだ寝ぼけているようなので、私が説明する。

「今８時半、朝快晴にメールしたけど返事ないからきっと寝てるなぁと思ったから１人で来たんだよ！」

快晴はやっと目が覚めたみたいで

「オレ寝坊しちゃったんだぁ～ごめんね？」

「ううん、ちょっと不安だったけど、ちゃんと来れたからね☆快晴帰って来るの遅かったから少しでも寝せてあげようと思って」

「う～、沙耶～ありがとう☆カワイイ～大好きっ☆ってゆうか、目が覚めたら部屋に沙耶いるって最高なんですけど…」

そう言って思い切り抱きついてくる快晴。

「とりあえずオレ顔洗ってくる」

そう言って下に降りてった。

戻って来てから一緒に朝ごはんを食べて、いつものようにイチャイチャして、そうなったらもうエッチになってしまう。

昨日はガマンさせてしまったから今日はされるがまま、いつもより激しいエッチをした。

快晴とのエッチは気持ちいけど、実は不満が1つある。

「快晴ってイクのが早すぎ…」

ついつい口に出てしまった私に快晴が甘えながら

「だってぇ〜、本当気持ちいんだもん！ガマン出来ないんだよ」

「別にいいんだけどさ〜」

「沙耶は満足してない？」

満足してないわけじゃないけど…。
でも腰振って2分もたたないうちにイッちゃうんだもん…

「まぁ、別にいいんだけどね！」

「もう1回しよっか☆」

抱きつきながら快晴が言ってきた。

「え～？2回はいいよ～。疲れるし…」

そう言ってる間にも快晴は私の服を脱がせている。

「もぉ～！」

脱がされたらヤるしかないと思ってヤったら何故か2回目が痛い…。

結局痛いのをガマンしてエッチをしたから別に気持ち良くもないし…。もう1日に2回は絶対にしないと心に決めた。

エッチが終わってしばらくゴロゴロしていると私の携帯が鳴った。
電話の相手は私の中学からの男友達の佳祐からだった。

「もしもし？どうしたぁ？」

最近会ってないけど元気かっていう電話だった。

私は彼氏が出来た事を話すと

「今度こそ上手くやれよ」と言われた。

佳祐には気を使わないで何でも話せる。今まで私が経験した事を佳祐は全部知っているから、今彼氏と上手くいってると言うとすごく喜んでくれた。

「じゃあ邪魔したな。彼氏と仲良くやれよ！またな」「うん！サンキュー、佳祐。またね」

そう言って電話を切った。

「ごめんね快晴。友達からだったよ」

そう言ってフッと快晴の顔を見ると何か今まで見たことがない怖い顔をしていた。

「…快晴？どうしたの？」

「…電話…誰から？」

「えっ？友達からだよ？」

「…男？」

そう聞いてくる快晴の顔を見て思い出した。

そう言えば

「オレ、すごいヤキモチ焼きだから」って言ってたっけ。

「うん。男友達…中学からのね…」

「ふーん…。オレさ、すげ～ヤキモチ焼きって前沙耶に話したよね？」

「うん、言ってたよ」

「じゃあどうしてオレの前で男からの電話取んの？」

なんだか険悪なムードだ。どうも私が快晴の前で男友達からの電話を取った事が物凄く気に入らない様子。

私は正直ビックリした。確かに私もヤキモチ焼きだけど、やっぱり男だって女だって友達は友達だ。彼氏が出来たからと言って昔からの友達を無視なんて出来ない。

「…快晴が心配するような事は何もないよ？」

「そんなのわかんねーじゃん。相手が沙耶の事狙ってるかもしれねーし」

「それは絶対ないよ。友達彼女いるし。本当に友達だから。…ねぇ、快晴はあたしの事信用してないの？」

「そういう訳じゃないけど男と連絡取るのは嫌だ」

はっきり言って気分が悪かったし、自分の事を快晴は信用してないんだと思うとショックだった。

それに、こんなに怒ってる快晴を見て正直怖かった。

「本当に何もない男友達でもダメなの？」

「ダメ。男は男でしょ」

あたしは、もう何を言ってもわかってくれないと思って

「…わかった。もう連絡取らないわ」

快晴の前ではそういう事にしておこうと思った。

…結局そういう事で話わ終わり、もう男友達とは連絡とらないという事で快晴の機嫌は直った。

私としては、快晴にバレないように男友達とはこれからも連絡を取ろうと思っていた。

そんな話をしているとあっという間に時間が過ぎ、帰る時間に。

快晴がいつものバス停まで送ってくれた。

「…なんか、今日はごめんね？怒っちゃって…」

「あたしの方こそ…快晴にイヤな思いさせちゃってごめんね…」

お互い謝り、私はバスに乗った。

謝りはしたものの、心の中はすごくモヤモヤしていた。

快晴がここまでヤキモチ焼きとは……

これから先が少し不安になった日だった。

第１６話～初めてのケンカ～（前書き）

しばらくの間、投稿出来ませんでした。
もし、この小説を読んで下さっている方がいらっしゃっていたら大変お待たせ致しました。どうかこれからもよろしくお願い致します。
是非感想などありましたらどんな事でもいいので書いてくれたら嬉しいです。

第１６話～初めてのケンカ～

快晴が意外なまでのヤキモチ焼きと知ったその夜、私は昼間かかって来た佳祐に電話をして、彼氏がヤキモチ焼きだという事を説明して、佳祐と連絡を取る時は私からするという事でわかってもらった。

「佳祐は本当に私にとっては大事な友達なのにさ、ごめんね？」

「あ～、オレは別にいいけど、お前が大丈夫なの？なんかすげー束縛されそうだな」

確かに…。

男と連絡取っちゃダメとはっきり言われて、それ以外でも、いろんな事で束縛されそうな予感はしている…

「…でも好きだからさ…。それに私もヤキモチ焼くし、束縛されたって大丈夫だよ！」

そう強気で言う私に佳祐は

「まぁ、お前がいいならいいけどさ、頑張れよ」

「ごめんね、ありがとね。また私から連絡するから」

…佳祐はうまくやれよと言って電話を切った。

いつも私の相談にのってくれる佳祐は本当にいい友達だ。

「連絡取らないなんて出来るわけないじゃない…」
私は快晴にウソをつくという事に少し罪悪感はあったが、佳祐のアドレスは消さないでそのまま残した。

――次の日

私と快晴は相変わらず仲良くバイトまでの時間学校で遊んでいた。
「そうだ、昨日友達から電話来てさ、明日バイト休みだから友達と遊ぶ事になったんだ～」
快晴と付き合い初めて約3ヶ月、私は自分の友達と全く会っていなかった。
快晴と付き合うようになって休みの日はデートっていうのが当たり前だったけど、そろそろ地元の友達とも会いたい。
連絡はマメに取っていたけど、高校が違うからなかなか時間が会わない。それでやっと都合がつくから会おうという事になったのだ。
「久しぶりだからすごい楽しみなんだぁ～」
と嬉しそうに話す私に対して快晴の顔つきがまた暗くなる。
「せっかくバイト休みなのに…。オレと一緒にいたくないの？」
「えっ？」
快晴の言葉にビックリした反面呆れた。
「遊びたくないわけないでしょ！いつも遊んでるじゃない！」

たった1日友達と遊ぶというだけでこうなのかと思うとなんだか切なくなってくる。

「友達って誰？男？」

「女に決まってるじゃん！幼なじみの美也って子だよ」

「…ふ～ん。まぁ、別にいいけど…」

ふてくされ顔で快晴は言った。その快晴の不満げな言い方に私もカチンと来た。

「ていうかさ、快晴はあたしと遊んだ後毎日のように地元の友達とかと遊んでるじゃん。あたしだってたまには友達と遊びたいって思っちゃダメなの？」

自分は良くて私はダメなんておかしい。

すると

「だから別にいいって。オレだめなんて一言も言ってないじゃん」

――ブチッ

その逆ギレする快晴の言葉に私はキレた。

「ちょっと！いい加減にしてよ！なんで逆ギレする訳？あたしそん

なおかしい事言ってる？別にいいんならそんな言い方しないでよ！大体逆ギレするなんておかしいじゃない！友達と遊ぶ約束しただけで何でこんな嫌な思いしなきゃダメなのよ！」

私は思ってる事を大きな声で叫んだ。

快晴は黙ったまま何も言い返してこなかった。

言い返しても謝りもしない快晴にますます腹が立ち

「もうバイト行くから。じゃあね」

そう言って教室を出た。

すると

「沙耶っ！待てよっ！」

快晴が教室から叫んでいる。

しかし言い方がキレ口調だったから

「なんであっちがキレるの？逆ギレばっかじゃん！チョ～ムカつく！！」

私はその言葉を無視して学校を出た。快晴は追いかけて来なかった。

「初めてケンカしちゃったな…。でも私悪くないし。あっちが謝ってくるまで絶対許さないもん！あ～ムカつく！」

ムカムカする気持ちを押さえながらバイトに向かった。

少し早めにバイトに着いたが、すでに弥生が来ていた。

「おっ、かんちゃんおはよう！早いじゃん……。てかなんかあったの？怖い顔して」

バイト先に着くなり弥生があたしの顔を見て言った。

「おはよう。そんな怖い顔してる？私…」

「してるよ。快晴とケンカでもした？」

「そうなの！快晴ね、すごいムカつくの！」

怒りが収まらない私は、弥生にさっきの快晴との事を一部始終話した。

「なるほど…。それでそんなに怒ってんだ」

「そうなの！もうムカムカして今は快晴の顔も見たくない感じ！」

弥生に話してさっきの事を思い出した私はまた、怒りが込み上げてくる。

「大体あたし悪くないのになんであんなに逆ギレされなきゃなんないわけ？マジで意味わかんないんだけど！」

興奮しながら話す私に弥生は落ち着いた口調で

「まあまあ……。気持ちはわかるけどさ、それが年下と付き合うって事なんじゃないの？」

「どういう事？」

「いや…焼きもち焼いたりさ…。やっぱり快晴的にはかんちゃんが年上っていうのがあるから焦ってるんじゃない？かんちゃんの方が経験もあるし自分に自信が持てないから不安なんじゃないの？ちょっとくらいのワガママ許してあげたら？」

弥生の言葉で私も冷静になった。

「不安かぁ…。私快晴と付き合ってから不安になった事が一度もないかも」

「それってどうしてだと思う？」

弥生に聞かれ

「う～ん…」と考えてみる。

「かんちゃんは快晴に尽くされてるから、快晴に想われてる自信があるんだよ。だから不安にならないんでしょ？」

確かに…。

自分から行動しなくても快晴に言って欲しいこと、して欲しいこと全部してくれているからだ。

私は今まで付き合った人にはみんな私がそうして来た。

想われてるか不安だから一生懸命好かれるように努力して、自分だけを見てくれるようにと必死で頑張ってた。

快晴も同じなんだ…

私は快晴をすごく好きだし、大切に想っているけど、きっと快晴にしてみたらきっと私の快晴への愛情がまだ足りないのかもしれない。

年上で自分より経験があり、男友達も多い。

私は快晴の気持ちに気付き、反省した。

「あたしさ、今まで付き合ってた人には好きだから嫌われないようにってすごく尽くしてきたんだよね」

弥生に話しはじめると弥生も

「うん。知ってるよ」

「だけど、快晴と付き合ってからは確かに尽くされてばかりなんだよね。今までそういう人いなかったし、こんなにも想われてるって感じたの快晴だけでさ、その想いにあたし甘えてばかりで快晴の事全然わかってなかったのかも…。自分が1番不安に思う気持ちわかってるのに…」

自分が相手を不安にしているつもりじゃなくても、相手が不安に思っているなら安心させてあげなきゃいけない。

それを私は出来ていなかったんだ…。

「今日の快晴の態度はムカつくけど、あたしにも悪い所はあったんだなぁ」

少し落ち込みながら言うと

「まぁ、それに気付いただけでもよかったんじゃないの？早く仲直りしな」

「うん…。弥生ありがと…。やっぱ弥生最高だよ」

「フッ、わかってますよ？」

そう言って二人で笑った。

バイト終わったら快晴と仲直りしよう！

…でも、快晴から連絡が来たらね…。

あの態度はやっぱりムカつくから私からは絶対連絡してあげないもん！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4087c/

キラキラの思い出

2010年11月25日18時14分発行